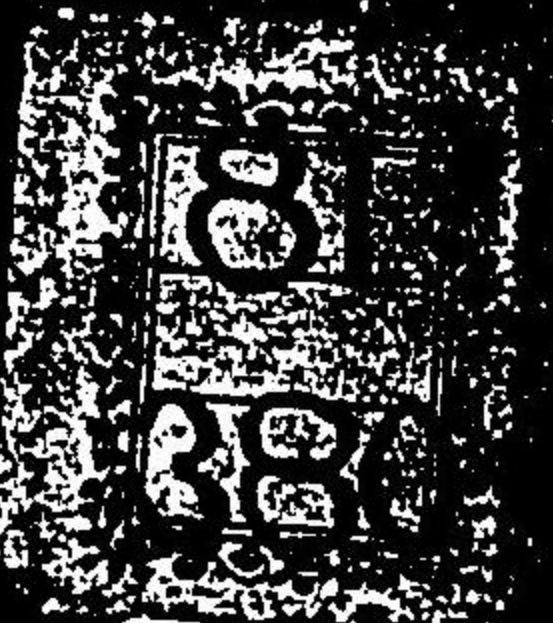


遊米見聞録



026980-000-9

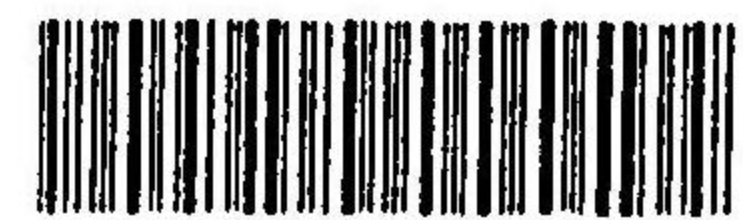
81-380

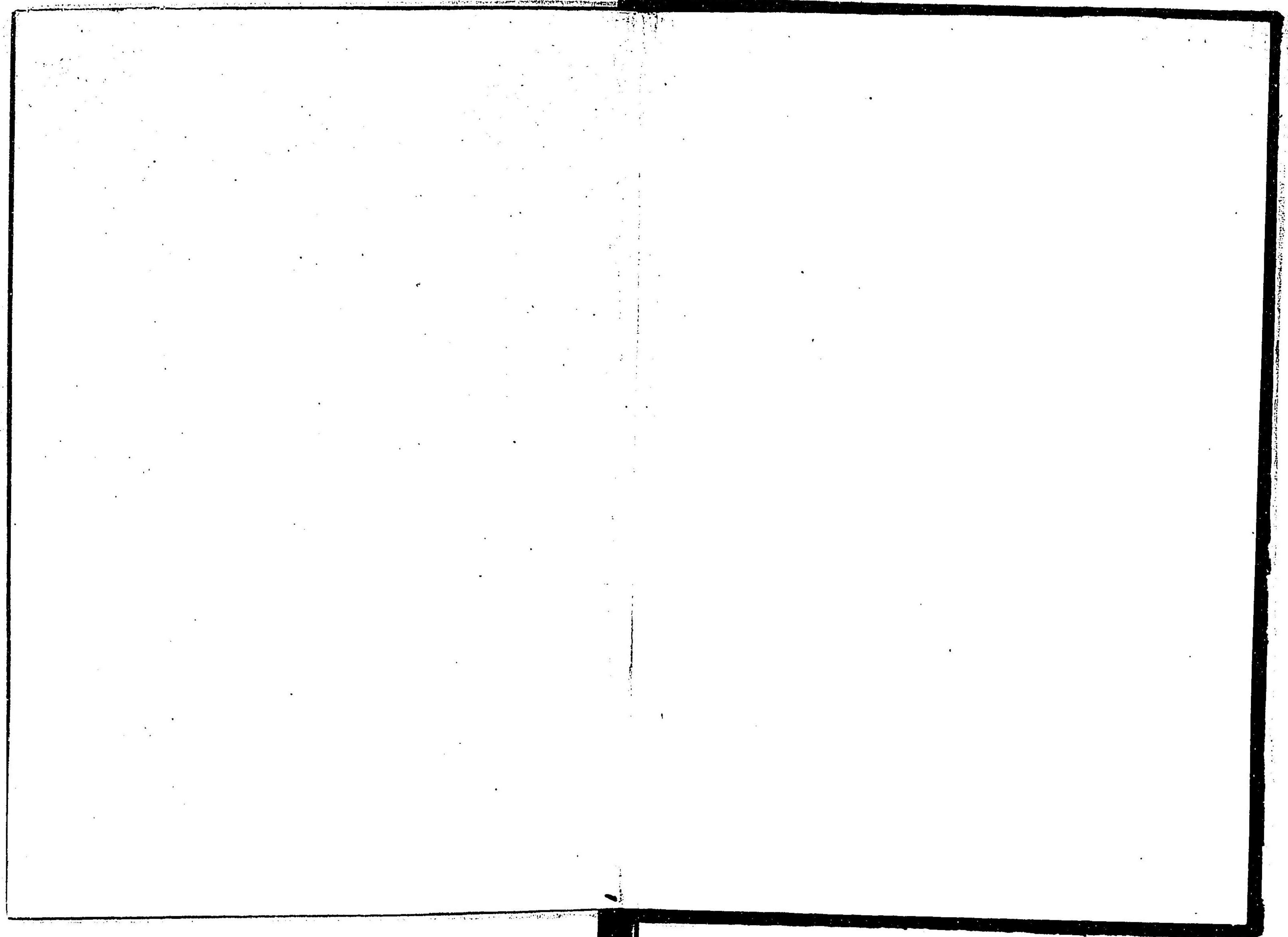
遊米見聞録

金子 堅太郎 / 著

M33

ADG-0109





金子堅太郎君口演  
水上梅彦君記述

梅彦君見聞錄

東京 八尾書店發行



## 遊米見聞録序

兩三年前、米國「ハーヴァート」大學より予に「エル、エル、デ、上」の名譽學位を親授するを以て、渡米して其の式に參列すへき旨を通牒し來れり。當時予は官務に鞅掌せしを以て、荏苒曠日、其の意を達することを獲さりき。然るに昨年五月、再ひ同大學より渡米の懇請あり。且つ予も亦幸ひ閑散の身なりしを以て、輒ち遊米の途に上り、往復八十有一日の日子を費し、此行を了へたり。米國近世の發展暢舒は恒に文籍、雜誌、新聞及歸朝者に依り見聞せしを以て、這回の米國巡遊は短日月なりしに拘らず、彼國

各種の人士と會見し、復た主要の工場等を巡察し、米國農工商業の現状、外交、軍政、通商貿易の方針を概観することを獲たり。歸朝後、各地方又各協會の招聘に應じ、見聞の事物に關し、所感を説述し、其の結果、予が論旨、新聞雜誌に掲載せられ、江湖の諸彦既に或は繕讀せられたる者あるへし。昨冬諸友交、予に勸むるに、見聞所思を記述して一小冊子とし、世間の參稽に供すへしとの意を以てせり。加之のみならず、書肆八尾氏親しく予を訪ひ、諸新聞雜誌に散見せる予の演説竝に談話の筆記を編次し、之を世に公にするの諾否を問はれたり、然るに其の筆記なるものは予の見聞所懷の十の一に過ぎざるを以て、新に續

述詳論し、以て氏の需に應すへきことを約せり。知友水上梅彦氏は諸友と同しく予に著述を勧めたる一人にして、自から記述の勞を執るの意を告げらる。此に於て時時同氏に口演し、今春稿成り、冊子として世に公にす。遊米見聞録即ち是也。

本書は題して遊米見聞録と稱するか如く、僅僅の時日間踏査見聞の餘に成りしものにして、固より米國近時の國勢を論述し盡くせりと謂ふへからず、唯國勢推移進暢の一斑を窺測するの資料とならば蓋し望外の幸也。

明治三十三年一月

溪水山人 金子堅太郎識

金子堅太郎口演  
水上梅彦記述

## 遊米見聞録

### 目次

- 第一、米國經濟の進歩……………一
- 第二、日米貿易の趨勢……………二十一
- 第三、米國の「ツラスト」……………三十七
- 第四、尼加拉加運河……………五十九
- 第五、太平洋海底電信の敷設……………七十一
- 第六、加奈陀新設鐵道及「フンシヨダ」問題……………八十九

目次

—

第七 日本輸出生絲の現在及將來……………百一

第八 日本輸出茶の現在及將來……………百二十一

第九 外資輸入……………百三十九

第十 結論……………百六十三

# 遊米見聞録

金子堅太郎口演

水上梅彦記述

## 米國經濟の進歩

日米兩國の過去現在の貿易を觀察し而して我邦か乘るべき將來の大方鍼を確立するは眞に日本經濟界の急務也予は本篇に於て第一に米國國家經濟の革易、米國の經濟上の地位、農工商各方面の進展を大局より學理的に汎論し、第二に日本より米國に對する主要の輸出品、米國より日本に對する輸入品の消長盛衰及び其の原因を查察し、以て我邦商工業家の一大憤發を促致せむと欲す。

予は米國に對し緣由自から深きもの有り。米國巡遊前後五回を重ね、初は學生、中頃は官吏、今回は在野の漫遊者として趨けり。余は近頃まで前後五年間職を農商

二  
務省に奉せしを以て、米國の經濟及海外貿易の情況を調査し且つ日本の農工商業の現況を巡察討議せり。昨夏第五次の米國巡遊を爲し、親しく彼國の情勢を觀察する所に據れば、米國の世界的國位は卒然として急進せり。外交的より之を觀るに、モンロー主義より一躍して進攻政策を採り、即ち受動的な世界主義(パンブ、コスモポリタニズム)を棄てて俄然として發動的な世界主義(アクチブ、コスモポリタニズム)を行ふに到れり。獨り外交政策の豹變のみならず、經濟政策に於ても亦然り。今日の狀態は從來の孤立退嬰の情勢を經過し、膨脹進取となり、舊時の内國的經濟より進て世界的經濟と成り、而して米國の經濟今日の進運を致せる所以のもの、一は以て米國政府積年の經濟政策宜を獲たると、一は以て國民各個の興業其の道を認らざりしに基因せるものにして、至尙の施設に縁り達し得たる組織的發達に外ならず。苟も世界的經濟の班伍に列する國民たる者は自國經濟の眞狀を世界に明示すへきのみならず、復た海外諸邦經濟の實勢を知悉せざるへ

からず、況むや米國の如き我日本と通商貿易上、至大至深の關係を有し、特に支那市場に於ては將來彼我の商利區域犬牙の如く相錯綜するもの多きに於てをや、米國は最近七年間に經濟上彰明顯著なる草變を爲せり。即ち米國は農業經濟より一躍して商工業經濟となれり。七年前までは専ら舊來の農業經濟を以て國利民福を増進するの手段とし、農産物即ち大麥、小麥、綿、砂糖、烟草及び羊毛等を主要の海外貿易品とし、以て富國の道を講し、一國政府の經濟の如きは幾むと唯一の海關税に憑依せり。此を以て歐洲の人士は米國を識しりて農業國也、借金國也、外邦民人の資本を仰かすして致富の道を講ずること能はざるもの也と藐視せり。然るに今や米國の經濟大勢全然基本より變易し、特に予か注意を惹起せし事實は米國農工商業の大方針にありとす。其大方針とは何るや、曰く米國の農工商業は上流社會の需要に應せんよりは、寧ろ中等以下多數人民の需要に供給せんと企圖しつゝあり是を以て凡百の事業は大規模に依り之を計畫設立し、多數の普



通品を産出又は製造して汎く世界の貿易市場を獨占するの決心を顯はしたり是れ即ち、ツラスト(信用同盟)發達の起因なり、已に商工業國として嶄然世界列邦に踔越するに足る組織的進捗を顯彰し、農業より工業に進移し、農工二途を駢進して天産並に人工の利を啓き、商業を昌にして大に海外貿易を振興じ、農工商三楷の重利を一攫するの勢有り、換言せば農業經濟より踴躍して商工業經濟となり、又内國貿易より突進して世界貿易を把握せんと企てたり、米國の盛運寔に想見すべき也。

米國巡回中、予は各種各方面の人士、即ち爲政家、經濟家、企業家、學者に逢遭し、説くるに日本最近の國勢を以てし、復た質たすに歐米の大勢及び其の前途を以てせり、予は茲に見聞したる結果の要略を説述せむと欲す、抑千九百零一年より開始すべき第二世紀に於て、世界を左右する強國は露英米の三國なるべし、露國は兵力を以て、宇内の覇權を把握すべく、英國は天下到處に資本を注下し、金力を制

して世界を操縦すべく、米國は農工業を以て人類の須要品及び機械類の供給の全權を獨擅し、以て天下を左右すべし、是れ歐米の聰明なる識者間の公論也、米國將來の世界的位置の何たる、蓋し概見するに難らず。

米國主要の農産物中、大麥、小麥は其の産出高極て多大にして全世界に於て産出する總額との比を觀るに、千八百九十六年即ち我明治二十九年には米國は其の二割を産出し、漸次農事進み、西部の開拓行はれ、千八百九十七年(明治三十年)には其の二割二分となり、千八百九十八年(明治三十一年)の三月には其の二割五分に及び、全世界産出總額の四分の一を專占するに至れり、夫れ小麥、大麥は人類常用の麵包粉の原料品なるか故に、米國は全世界の人類が常食とせる麵包の一大供給者と稱すべし、若し一個國にして單獨に全世界人類糧食の四分の一を供給する米國と一朝驟を生するか如きこと有らむ歟、之れか交戰國たる者は糧食を絶たるるの覺悟なかるべからず、是を以て之を觀れば、米國は戰時に於て此優勢を

具備し復た平時に於ては貿易上絶大の國利を増殖することを得るなり。  
綿も亦米國農産物中主要の一に位し、合衆國統計局の調査に據れば、米國の産出に係る綿は、全世界産出總額の六割五分を占むと謂ふ。綿は金巾、其佗總ての綿織物の原料なるか故に、別語を以て謂へば、米國は全世界諸邦民の被服中六割五分を供給するもの、即ち人類被服原料の過半を供給するもの也。之を要するに、北米合衆國は農産物即ち人類の糧食の原料たる大麥及小麥に於て全世界産出總額の四分の一を專占し、復た人類の被服の原料たる綿に於て全世界産出總額の六割五分を獨擅す。農事の進展に於ては、幾むと萬邦に踰越するものと謂ふへし、現時既に斯くの如し、其の將來の盛運必ずや人意の表に出づるものあらむ。  
更に米國近時の工業の進暢を観るに、鉄業及び製鋼業の如きは、己に先進國たる英獨二國を凌駕するに至れり。從來製鐵國として世界に雄視せし英獨二國も、米國に對しては幾むと顔色なし。之を事實に徴するに、千八百九十九年(明治三十

二年)六月の調査に據れば、米國の鉄鑄は千四百萬噸、英國は九百二十五萬噸、獨逸は八百萬噸を製出せり。謂ふまでもなく、字内の工業社會に立ちて工業經濟を確立するには機械を要し、機械を製作するには鐵を要す。今や米國は既に製鐵業に於て世界の製鐵國たるの名ある英獨二國を凌駕せり。將來米國が幾千萬噸の鉄鑄を製出し、以て工業社會を風靡するに至るや、彰彰乎として夫れ昭也。  
更に此鉄鑄より精製せらるる鋼鐵に至ては、英國は既に米國に數歩を輸せり。千八百九十七年即ち我明治三十年に於ける英國の鋼鐵製造高は九十二萬噸也。因に謂ふ、福岡縣門司に於ける官設の製鐵所は僅に一ヶ年九萬噸即ち英國の十分の一弱を製出する計畫に過ぎず。翌千八百九十八年(明治三十一年)に到り英國の鋼鐵製造高は減して七十五萬噸となり、前年度に比し一割八分の減少を來たせり。然るに米國に於ては千八百九十七年には百六十四萬噸を製出し、千八百九十八年には百九十七萬噸を製出し、前年に比し二割の増加となれり。惟ふに英國

に於ける減少は恰も米國の増加を致し、前者は後者の糧食する所となりしに非らざる乎。之を貿易上の事實に照らすに、斯の推測果して眞也。米國の軌鐵は既に印度に侵入するのみならず、英國軌鐵の好市場たる濠洲南米を始め支那及び露西亞にも進入し、復た我日本にも輸入せられたり。茲に米國製鋼が露國に供給せらるる一例を挙げむに、本年六月露國政府が米國「カーネギー」製鋼會社に買入契約を爲したる總高は十八萬噸にして、該會社技師は爾今一箇年間佐方よりの注文を拒絶し、專は露國の爲め製鋼事業に従事すべしと語れり。一佳話あり、請ふ之を語らむ。「カーネギー」會社社長「カーネギー」氏、昨年社務を擲ち、餘命を風月の間に送らむとするに方り、該會社は氏に贈るに一億五千萬弗即ち我三億圓を以てし、氏の私有財産になさしめたり。然るに氏及其の家族は、歐米孰れの地に歴遊し、何等の豪奢を極むることも、尙は毎年五百萬弗の餘剩あるを以て、其の費消方法を得るに苦しみ、知友に諮詢せる所あり。紐育、波士敦及び費府等の有數なる新聞及

ひ雜誌記者は「カーネギー」氏の爲に説き、此の鉅額の資金を慈善若くは公共事業の爲に消費せむより寧ろ之れを工業社會に投じ、滋、斯業の興隆を圖るべし。是れ比較的不急の事業を後にして、邦家の急務たる工業扶植を先にずるこそ良策なれど、唱道せり。一退隱社長の剩餘金消費法、猶ほ社會の一論題とある。米國工業社會の隆運想見すべし也。米國工業の進展は獨り銑鐵並に鋼鐵事業に於て之を觀るのみならず、復た機關車の製造に於ても之を實證す。「ボルドウ」機關車製造會社の報告に據るに、米國製機關車は印度に往き、支那に入り、西伯利を奔り、濠洲に涉り、復た日本に來たるのみならず、南米、加拿陀を馳騁し、太甚しきに至ては、英國に於て有名なる機關車製造場たる「マンチエスター」を通過し、現に「グレート、ノオザン、アンド、ミッドランド、レールウェイ」會社に於て米國製機關車を使用して貨物及乗客を往復せしむるに至れり。米國は機關車製造業に於ても、銑鐵並に鋼鐵製造業に於けるか如く、宇内獨歩の盛運に趨けり。

米國は復た機業に於て近時長足の進捗を爲し、絹織物の如き、金巾の如き、先進國をして後之に瞠若たらしむるに足るもの有り。從來英國「マンチェンスタール」は金巾製造の淵藪にして、米國に輸出する所極めて多大なりしか、近年米國が一たひ金巾製造に従事するや、自國の需要は自力にて供給し、更に進て南米、支那、濠洲、日本に輸出し、大西洋を逾えて歐洲大陸にも侵入するの勢也。清國駐在英國領事「ブレナ」氏の昨年の報告を閱するに、四十年來英國が支那貿易に於て獨擅せし金巾貿易も今や米國の手に移り、現に雲齋の如きは英國の掌裡を逸脱して全く米國の掌裏に歸せり。此趨勢を以てすれば、金巾も竟に年を出すして米國の有に歸すべし。復た近くは三井物産會社の上海支店長が齎らし歸りし米國製金巾を實見したる人の談に依れば、其の發達偉大にして所詮本邦製金巾の克く及ぶ所にあらず。一帯帯水の隣邦にして競争し得るの望なし。豈に憤慨せざるを得む耶。而して米國工業の發展は實に獨り金巾のみならず、陶磁器、硝子、羅紗、金銀細工、建築用

十

材等孰れの方面も同一均齊の進暢を顯はせり。

米國の農業並に工業の發展既已に斯くの如くなるを以て、其の海外貿易の進暢を觀るへきは、素より自然の數耳。試に其の近時の米國製造品の輸出額(送荷金額)を擧げむ。

一八九六年	二二八、〇〇〇、〇〇〇
一八九七年	二七七、〇〇〇、〇〇〇
一八九八年	二九〇、〇〇〇、〇〇〇
一八九九年	三三八、〇〇〇、〇〇〇

(因に謂ふ米國の貿易年度は前年の七月より翌年の六月に至るもの也) 是に由て之を觀れば、千八百九十九年(明治三十二年)の貿易年額の如きは、三億三千八百萬弗、即ち我六億七千六百萬圓の鉅額に上り、最近三年間即ち一八九七年、一八九八年及び一八九九年の貿易純益額は、海關稅賦課金額を削除し、實に五億

萬弗に達せり。豈盛ならず乎。

十二

方今寰宇中に國を建つるもの百を以て數ふと雖も、利源の大、兵備の強、糧食の多を以て、強邦の班に伍するもの指を屈すれば僅に英、露、獨、佛、澳、米、伊、日の八國を得るに過ぎず。而して戰時に方り、糧食詳言せば麵包及肉類、被服並に鑄貨原料たる金の供給を自國のみに於て辨して餘ある富國を物色するに、八大強國中唯一の北米合衆國ある而已。是れ現代の聰明にして深識ある世界の經世家、外交家、經濟家及ひ、帥兵家か、北米合衆國の國家的發展を注眸審査して止まざる所以也。同國か棉及大麥、小麥の農産物に富り、衣食の獨立供給を具有せることは前に叙述するか如し。

予は是より進んで北米合衆國金山の絶大なる寶源を深藏せる事實を説くへし、米國造幣局長最近の報告に據るに、合衆國內に於て毎年採掘したる金貨の惣額六千萬弗、即ち我壹億二千萬圓に及へり。又亞拉斯加より千八百九十九年七月ま

てに採掘輸入せられしもの四千萬弗に達せり。而して北米合衆國中尤も金礦に富める州は「アイダホ」コロラド及「カリフォルニア」の三州なりと謂ふ。因に説く一昨年中英領「クロンダイク」より北米合衆國に輸入したる金塊の惣額は一千五百萬弗也。以て北米合衆國か金礦に富めることを推知するに足るへし。既に被服、糧食の原料饒多あるに加へて、無盡藏の金礦を具有す。北米合衆國は夫れ天賦の強邦なる哉。

更に米國內地銀行業の狀況を觀察するに先ち、總ての金融取引の咽喉たる手形交換所の景況を説かむ。予昨夏六月十九日、紐育手形交換所の一日間の交換高を閱みせしに、一億七千三百萬弗に及へり。其の盛況驚くに堪へたり。而して一昨年七月と昨年七月との手形交換高の増加率を擧ぐれば左表の如し。

米國東部

市俄古

百分の二十五

紐育  
費府

百分の四十八

百分の三十九

「ビツバルグ」

百分の二十九

「バフアロウ」

百分の三十一

米國西部

「アクロン」

百分の六十七

「デモイン」

百分の六十六

「シヤトル」

百分の九十七

翻て紐育の銀行の手形交換高(明治三十二年一月より七月三十一日まで)は五百五十二億五千七百萬弗、即ち我千五百億千四百萬圓の鉅額に昂進せり。之を以て昨年一月一日以降同年七月三十一日までとの交換高二百九十九億三千萬弗に比較するに、九割の増加と爲る。實に絶大の盛況と羨望するの外なき也。又米國に於

ける貯蓄銀行の預金高と歐洲諸國に於ける貯蓄銀行の預金高とを對觀するに、米國の貯蓄銀行の行數は九百七十九個にして、其の預金總額二十億六千五百萬弗の多額に達す。之を以て英佛伊露四ヶ國の貯蓄銀行に於ける預金高の總額に比較するに實に三億萬弗の超過を示せり。現に米國の西南にある一州「カンザス」の如きすら昨年七月一日の調査に依れば銀行の預金高四千七百萬弗に及び一昨年に比し二百五十萬弗の増加を見る。

此一大富源を占領し、商工業各般の進暢發舒を企圖す。北米合衆國の外國貿易の隆昌、豈に偶然ならんや。現に昨年七月一日より同三十一日までの一箇月間の海外貿易額は九千二百萬弗に及び殆んど一日に付三百萬弗の貿易高なりとす。而して之を以て一昨年七月に於ける一ヶ月間の貿易高六千九百六十萬弗に比較すれば實に二千二百四十萬弗の増加を見る。其の世界經濟を左右するの勢力ある、主因洵に茲に在り。

又航海業の發達に付き一言せん、世人多くは米國人を以て航海業に精練ならずと譏りしか、必要は米國人を化して海國民たらしめ、國土の腹背を洗ふ大西洋並に太平洋兩洋の航海、運漕事業に適應する船舶、船員を兼備し、耐海性及び航洋實験を具有せり。千八百九十八年の船籍に依りて、百噸以上の各國汽船及び帆船を較量するに、

英國	千二百五十八萬七千噸
米國	二百四十四萬八千噸
獨國	二百一十一萬三千噸
佛國	百十七萬九千噸

を有し、米國の船舶噸數は夫の海洋の女王なる英國にこそ及ばされ、獨佛兩國を凌駕する既に遠きものありて存す。惟ふに米國が將來海國たる天與の地形を善用し、尼加拉運河を開鑿して、表裏兩洋の水を相通せしめ、以て大西洋海岸と

太平洋海岸の自國航海を旺にし、進て東西兩半球の航海に従事盡瘁するに至らば、其の進展意表に出づるものあらむ。

海外貿易に於ては五億萬弗の純益を收め、又國內に於ては毎年六千萬弗の金貨を採掘し、實に米國の資本は潤澤盈溢し、其の勢必す海外に疏通の路を索め、他國に入りて各種起業の資本とならざるを得ざるなり。現に予か昨夏米國に在りて、六月一日より同月十四日に至る二週間同國の金貨の歐洲に輸出せられたるものを調査せしに、其の金額八百五十萬弗即ち我千七百萬圓に昇れり。此金貨は英蘭銀行、佛蘭銀行等の準備金となり、或は歐洲大陸に於ける事業の資本となれり。是に由りて之を觀れば、米國は現に歐洲に對して資本主の地位に立てるもの也。而して斯くの如く盈滿せる資本か運用せられつゝ、ある方法を討尋するに、紐育、波士敦、費府、市、俄古等に於ては各洲より發行する州債は三朱利付にして券面又は券面以上の價格を以て應募するを常とす、又外國の公債に付ては之を云へば

現に昨年墨西哥政府より發行したる五朱利付公債三千萬弗は價格九十九弗五十仙を以て引受けたり而して確實たる株券を買收する者極て多く買人は陸續市場に顯はれ之か爲め一昨年のおきは株券の昂騰太甚しく額面百弗の株券にして二百弗の市價を保持するものすら有り此株券を買收し倘は餘財あるものは多くは海外に投資せむとするの形勢なり此の如き趨勢を以て將來進歩すれば米國の富は漸を以て倍蕪し三倍四倍となるの日蓋し遠きにあらざるへし殊に米國人は勇往果斷の資に富み開拓進取の氣に滿てるを以て一旦自から利ありと認めたる方面には驟然として其の資本を注下し敢て逸巡躊躇すること莫し予の波士敦に在るや「ニュー・イングランド」紡績會社に於て去る七月の初旬を以て社債券五百七十萬弗を賣り出せり其債券は五朱利附百弗券なりしか同會社は之に百十弗の價格を定て賣り出せしに廣告後置に五日にして申込額は既に發行高の三倍に達し會社の重役等は半露すき文て申込の應答に忙殺せら

れたり此の一事偶、米國國民か資本に富める程度を測るの資料とするに足る。之を要するに米國經濟上の進捗にして今日の速度を以て挺進して含ますむは、紐育は遠からずして第二の倫敦となり米國の資本は普ねく世界の需要に應じて供給せられ米國は宇内の金權並に之に附帶する諸種の特權を掌握するに至るや必せり故に第二十世紀に於て世界の殖産興業の大權を管制するものは英國にあらす獨逸にあらすして實に米國なるへきか如し且つや米國人は今既に深く支那内地に入り其の無窮無限の富源を開拓す惟ふに彼れの潛勢力資本及び近世式設備を以てせば他日支那貿易の全權米國の掌裡に歸するに至らむ由來支那は我日本商工業家の至近にして至大なる華主とする所なるを以て此際大に日本經濟を伸張し海外貿易を進捗せしむるは日本商工業家の一大任務に非らずして何るや。



## 第二 日米貿易の趨勢

米國の經濟上の位置並に其の農工商各方面の進暢概ね斯くの如し更に轉じて日米兩國間貿易の大勢を通觀するに、近時日本と北米合衆國との貿易上の趨勢は漸次一變せむとするの徴あり。從來我邦の海外貿易は、日本より米國に對しては輸出額尙かに輸入額に超越し、所謂大賣越の姿となり、以て我邦が歐洲に對する大買越し、換言せば歐洲よりの輸入が我邦より歐洲に對する輸出に超過するものを相削減するの狀態也。然るに此趨勢近時著るしく動搖擾亂し來るを觀る。左記の表即ち其の證左也。

年次	米國へ輸出	米國より輸入
明治十二年	一〇、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
同 廿二年	二五、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇

同 廿九年	五二、〇〇〇、〇〇〇	二七、〇〇〇、〇〇〇
同 卅一年	四七、〇〇〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇、〇〇〇

明治十二年には日米兩國間の貿易は日本の勝利を示し、即ち日本の輸出は米國よりの輸入の三倍強に當り、十年後即ち明治廿二年は輸出は輸入の四倍強に當りしか、爾後十年の星霜を閱みし、明治卅一年に至り輸入大に増進し輸出に及ばざること僅に二割即ち七百萬圓に過ぎず。是を以て之を觀れば、從來米國への賣越を以て歐洲への買越と相償はしめ、以て日本國家經濟の大權衡を保維せしめ居りたる情勢も、竟に頽壞せむとするに非ずや、而して斯の情勢の變易は明治卅一年卒然として顯れたるものにあらず、明治廿九年に於て既已に輸入は輸出の半額以上を超越し、従前の三分の一、若くは四分の一に及ばざりし情勢を徐徐に變易せしことを視る。是れ一國の經濟に注眸する人士が輕輕視すること能はざる顯象也とす。予か昨夏米國を巡遊するや、特に意を茲に注ぎ查察する所あり、將

來日本は米國に向て輸入に超過する輸出を爲し、以て既往の輸出大超過の舊位に復することを得へき乎。將た米國の製品輸入は汪洋として長江大河の如く竟に停まる所を知らず、經濟界の趨勢滋々急變し、我日本は米國に對しても亦歐洲諸邦と同じく買越しの國と爲るへき乎。先づ彼我輸出入の各主要品につき調査し獲たる結果を示さむ。

第一、輸出品の現状及び其の將來

(一) 生絲 我日本貿易品中第一位を占むるものは生絲にして、將來輸出増進するの望有り。伊太利、佛蘭西及び支那蠶絲と對比するに、本邦生絲は類節多く「デニール」の差等比較的太甚しきも、著色及び練減寡少の點に於て獨得の良質あり。而して「デニール」の差等は人工を以て改善することを得るのみならず、著色及び練減寡少の良質は全く自然力即ち日本環海の黒潮の影響に基因するもの也。故に我生絲の特質は伊佛清三國蠶絲者か企及すると能はざるもの也。是れ日本生絲か

歐米絹織社會に獨得の需要區域を有する所以也唯「デニール」の差等太甚しきを以て海外の機業工場に於て我生絲は縦絲とせず寧ろ經絲として使用せらるるの傾向あり故に予の觀る所を以てすれば我日本蠶業地を數區に分ち各區に於て至適の蠶種を簡撰飼育し製絲術を改善せば生絲貿易の前途蓋し洋洋として春海の如きものあらむ(生絲に關しては別に生絲の部に於て詳説せり故に爰に之を細論せず)

(二)日本茶 我綠茶の現状及將來に就きても予は別に詳述せしを以て茲に之を贅せず唯一言すべきもの有り。佗なし我綠茶は一方に於ては支那及印度の製茶竝に南米其他諸國の珈琲の壯猛なる競争を享け佗方に於ては米國に於て一十仙の關稅を賦課せられ幾むと死地に沈淪せり唯纔に一條の活路を獲るの地は英領加拿陀也然りと雖も加拿陀政府も亦其政費膨脹し新稅源を覓むること急也其の當局者の如きも既已に輸入茶課稅を以て良策と認む惟ふに我綠茶か

將來加拿陀に於て北米合衆國と同しく課稅せらるるに至らば實に容易ならざる一大事件也之を要するに日本綠茶は前述數箇の同種類飲料の競争及び經濟的施設より來る間接的阻礙あるを以て前途暗慘として幾むと光明を認むること能はず。

(三)羽二重及ひ甲斐絹 米國に於ては紐育費府「バタスン」等にある諸工場は今や羽二重、甲斐絹を織らざるは莫し而して獨り其の品質良に我製造品に優るのみならず其の價格亦低廉也然れども平羽二重及綾羽二重の二種は尙ほ輸出増加の見込十分なり予か米國に淹留するや一日日本より同國に輸入せし羽二重及ひ甲斐絹の縞物及模様物と同國製に係るもの各數十種を集收し彼我を較量するに其の光澤、縞柄、着色、模様、の諸點に於て日本製品は既已に米國製品の敵に非ざるのみならず日本製品は製造後の仕上げ不完全なるを以て米國製品に比すれば其の精粗醇駁幾むと天淵の差あり惟ふに日本製の縞及模様の羽二重又は

甲斐絹は品質の粗悪加ふるに關稅賦課の爲め、將來輸出額の増加は望み少なきか如し。

(四)陶磁器 予曾て名古屋及び京都を巡察するに方り該地の陶磁器製造家は陶磁器の米國輸出は壅塞杜絶の姿也、爾今唯支那若くは歐洲にのみ輸出を圖るの外他に途なしと歎するを聴けり。此を以て予か昨夏米國に游ふや、特に陶磁器に就き視察せし結果、我斯業家の浩歎の事由を詳にすることを得たり。事由とは何らや曰く佗なし。(一)米國には全國到處陶磁器製造の原料たる粘土存在し、トレントン其の佗各地に於て既己に陶磁器製造所を創立し、之か製造に従事せること(二)獨逸製陶磁器滔滔として侵入し、以て創業日尙は淺く技藝隨て幼稚なる米國製品を補ひをること、即ち是也。現に紐育に於て日本人の陶磁器店頭に陳列せる陶磁器の大部分は日本製品にわらずして獨逸製品也。日本陶磁器か米國輸出を遞減し、近時幾ひと壅塞杜絶の窮境に陥れる主因は實に茲に存す。我斯業者の注

眸潜思すへきは所謂獨逸製品か或る技藝に於ては本邦人の手を籍るの一事也。獨逸に於ては素地を焼き、主要の畫附を施し、然る後一たび之を日本に輸送し、本邦人の手を籍りて緣若くは其の佗瑣々たる彩色を施し、而して獨逸製品と稱して之を米國に輸出すること即ち是也。米國に於ても方今獨逸製品を歡迎する所以のものは自國陶磁器製造業か未だ十全の發達を爲し得ざるを以て也。然りと雖も其の發達を視るに至らば、獨逸製品も亦驅逐せらるるの厄運に遭逢すへし、況ひや本邦製品をや、斯業者か銳意勵精、商機挽回に盡瘁すへきの秋、今の時を措て復た孰れの日かある。

(五)華絨 華絨の前途は眞に憂懼に堪へざるもの有り、從來米國に輸出せらるる本邦製華絨は主として彼地富豪の有に係る海濱若くは山野の別業に於て敷物として用ゐられしが、豪華奇新を是れ競ふ素封家の習として昨夏用ゐしものを今夏再び用ふることを厭ふのみならず、輸出せらるる我華絨は、意匠、色彩俱に干

遍一律、毫も嶄新妙奇の工夫を加へざるを以て、今や幾むと厭倦せらるゝに至らむとす。特に米國華廷輸入商は一昨年来自から香港に工場を設け、支那の原料蘭を用ゐる支那人を役し、自國の嗜好を案し、且つ被服、壁紙、絨氈等の模様を参酌し、新華廷織業に従事せりと謂ふ、日本斯業者は今に方て商運を恢復するの道を講ずるにわらすむは、本邦製に對する米國人の厭嫌竝に此勁敵の爲に輸出減退の悲境に臻るべし。

(六) 段通 堺段通は今や殆ど全く米國市場より驅逐せられたり、堺市段通組合員等は曾て長嘆して謂らく、我段通の米國に於ける販路は既已に壅塞せり、佗に新に需要地を獲るに非らずむは、我等は堺市の産業を擲つの外、亦他に途なしと、予其の茲に至れる原因を考覈し、二個の事由あることを曉知せり。第一、我段通は華蕙と同一く意匠竝に色彩の千遍一律にして變化の致に乏しきこと、及び化學的應用拙劣粗笨にして、著色淺弱なるか故に、暖爐を置き室内の温度高き室房に敷

けは褪色することを免れず、第二、米國に於ては既已に紐育に段通工場の設けありて機械を應用し、孜孜として之れか製造に従事し、自國人民の嗜好を知悉するのみならず、遠く佛蘭西及伊太利等の意匠を潜心研鑽し、應用化學を適用し、醇良にして低廉なる製品を出たすに至れり、本邦段通か米國に於て其の市場より排斥せらるるは豈に偶然ならむ耶。

(七) 雜貨 團扇、屏風、暖爐の火よけ、窓掛、卓掛等の雜貨は將來輸出減少するとも増進すること莫けむ、惟ふに當初日本雜貨か米國に愛玩せられたる所以のものは歐洲輸入の雜貨か米國に厭嫌せられたる際、偶輸入せしか故耳、日本雜貨は當初ころ米國人の眼には意匠、輪廓、色彩孰れも新奇と映したれ、爾來年年歲歲輸入するもの盡く同一型式なるを以て、氣象旺盛奇新維れ、趁ふ米國人か、竟に厭惡の情を起し、復た之を鍾愛することなきに至るは、蓋し必然の勢ならむ。

第二輸入品の現狀竝に其の將來

(一) 棉花 前項に於て叙述するか如く、米國は世界萬邦に於て消費する棉花總額の六割五分を供給するの生産力を有す。而して米國棉花の我國に輸入するものを年を趁ふて増進するの趨勢あり。即ち明治二十七年に於ける輸入價額は僅に二萬圓内外に過ぎざりしも、五年後即ち明治三十一年には一千四百七十五萬圓に上れり。其の増進の絶大なる、寔に愕くへし。惟ふに今後日本の紡績事業の伸張に伴ひ、棉花の輸入は滋々増進すへし。特に米國棉花は支那若くは印度棉花に比し品質佳く、纖維長く、紡績に適し、且つ價格も亦高價にあらず。故に將來日本に於ける米國棉花の輸入は増加するも決して減少することなかるへし。

(二) 葉煙草 明治二十九年には五十一萬圓の輸入なりしに、同三十一年には二百九十四萬圓となれり。米國葉煙草は最も日本の紙巻製に適し、印度産馬尼刺産に比し品質好良也。我專賣局に於て葉煙草專賣法を施行せむとするや、米國葉煙草に就きて特に査覈せりと聞く。同專賣法實施後、米國葉煙草輸入は著しく増加せ

り。其の將來の増進推知すへき耳。

(三) 小麥粉 都鄙偕に洋食大に行はれむとするの勢あるのみならず、麵包は下等社會の糧食となるの風あり、且つ日本人は上下貴賤老幼男女の別なく、菓子を愛嗜するの人種にして、隨て製菓の原料たる米利堅粉を使用するの量増加す。現に明治二十九年には九十八萬圓の輸入なりしも、同三十一年には百九十七萬圓となれり。將來の増進も亦既往に對する現時の若きものあらむ。

(四) 機械類 機械類に大小二種の別有り。大は機關車、汽罐の類を總稱し、小は所謂「ハンド、メシオン」(手工機械)の類を概稱す。前者は既已に詳説せるを以て復た茲に贅せず。後者は日本の如き毎戸工業の殷盛なる工業社會に適すへきは論理的結果也。在紐育本邦人にして久しく米國に居住せるもの、其の瞭解に據るに、是等の「ハンド、メシオン」は宛も日本人の爲に特に發明せられたるもの如く、極て克く日本毎戸工業に適合し、或は木材に穿孔し、或は柱角を剝削し、或は革皮を裂き、紙片

を截り、織布を裁つ等凡百の手藝に適應するに、其の利鋭にして神速なる世界幾  
 ひと之に匹敵するもの無し。此種の小機械は由來「ハンド・メシオン」製造を以て聲  
 譽ある佛國及獨國にも亦侵入するの勢也。今後日本に輸入し來るは鏡にかけ  
 て睹るよりも明也。

(五) 時計及金銀細工品 「ウォルサム」、「エルギン」等にて製造する時計は機械を應用  
 するか故に、製造高も宏大にして、品質堅牢、價格低廉也。斯業者の方針は中流以下  
 の社會に洽く購買せしめ、歐亞兩大陸人民をして米國製品を所持せざる者莫き  
 に至らしめむとの意氣を挾めり。我邦の如きも此種の輸入滋と増加するの兆あ  
 り。

若し夫れ金銀細工に至ては大に注眸警嚴すへきものありて存す。方今米國「アト  
 パロウ」、「プロヴデンス」、「紐育、費府等に於て、金銀細工工場盛に創設せられ、電  
 氣鍍金の時計鎖、指環、鈕、袖口鈕、襟鈕、婦人用「パチン」止、玩弄物を製出す。其の製作の

精妙にして、其の價格の極廉なる蓋し、天下獨往の弊あり。之を例證せむに、其の製  
 作に係る時計鎖の如きは、其の金色燦然として幾ひと純金に異なる所なく、其の  
 價を問へば僅に一弗に過ぎず。袖口鈕は三十仙、即ち我六十錢、指環は一弗にして、  
 孰れも十八ヶ年の保険つき也。人造金剛石を嵌入せる袖口鈕、指環の如きも、屢に  
 五十仙乃至一弗の増加に過ぎず。予は該工場所有主に就き、其の工業の商略を質  
 たせり。渠れ徐に應えて謂らく、字内と通觀するに、富者寡く、貧者多し。ロスチャイ  
 ルド「ワンダービル」の如き富豪、世復た幾人かある。純金寶珠の需要は自から限  
 あり。外觀美にして價格廉なるものは需要窮りなし。夫れ金銀珠玉は人の欲する  
 所なるも、純性のものは價高貴にして中流以下の辨する所にあらず。故に之れと  
 一見眞偽を識別すること能はざる金飾を施し、以て其の需めに應せむと欲する  
 耳。噫、渠れは經濟の原則を知れる者乎。所謂「數でこなす」の商略は最も廓大な  
 る商業範圍を畧取するものにして、成功の捷徑致富の要訣也。渠等か大資本を投

し、大工場を設け、産出額を多くし、販路を廣くするの眞意は果して那邊に存する乎、渠等か全世界の中流以下の民衆を收攬して、其の需要者、華主たらしめむと欲するや、殆乎として章也。特に亞細亞人種の如き古來金銀細工品を極て愛好するの性有り。土壤大に人口多く、購買力亦饒也。苟も此人種の需要に適し之れか供給を獨擅せば、其の富盛期して俟つへき也。紐育の「テフアネー」商會、波士敦の「ピグロ」商會、カナード商會の如きは從來有名なる金銀細工を販賣する大商店なり而して、茲に雇使する意匠家は老練なる者にて報酬は尙ほ月俸二百弗に過ぎず。然るに彼の鍍金細工の工場に於て使用する意匠家は三百乃至四百弗の月俸を給與せらるるを視る。蓋し前者は意匠數左まで多からざるも、後者は需要夥多を以て勢極て多くの新意匠を考案せざるへからず。是れ後者か前者より多額の報酬を受理する所以也。復た低廉の金銀細工品は需要者に於て厭嫌の情發し易く、春に購ひ秋に棄て、新を趁ひ奇を好むもの也。故に製造工場は委棄せられたるものを地

金と同價に買收し、更に改鑄し新意匠を加へて發賣するの勢也。米國金銀細工業情況斯くの如し。其の製品の日本に滯滞として輸入するは、亦必然の理勢也。其の他銑鐵、鋼鐵、石油、羅紗、金巾、紙等は孰れも規模宏大なる「ツラスト」に由り、多量に製出せらるるのみならず、其の價格低廉にして、販路も亦汎大也。特に米國斯業家は支那を始め東洋諸市場を以て漸次自國商業獨擅區域と爲さむとするの商畧を懷けり。其の製品の我日本に溢注せらるへきは、火を賭るよりも昭也。之を要するに、我邦より米國に輸出する諸種の貿易品中、將來較望あるものは生絲にして、絹織物之に次く、茶、陶磁器、段通、華越、雜貨等は幾むと増加の微光たに望み得ざるの觀あり。前途極て暗嶂晦障、而して米國の農産物並工業品は將に宇内に溢充横流せむとするの勢有り。我邦の輸出品の大部分は壅塞廢絶して、米國の輸入品は我市場に盈滿堆積することなれば、蓋し國家の幸ならん。日米貿易の大勢既に斯くの如し。知らず我貿易家の覺悟果して如何、經世家の政策果して



如何、日本國民の警嚴果して如何、觀よ米國海外貿易進暢經營の規模偉大にして設備宏遠なるもの有るを、内には發動的世界主義を乗り「ツラスト」の新組織わりて興業の實を擧げ、外には尼加拉加運河を開鑿して自紐約到橫濱航路一萬五千里を縮減して一萬海里とし、支那帝國に於ては廣東より漢口に到る鐵道を敷設して深く清國に入り、以て自國商業區域を皇張せむとす。米國貿易家の炯眼は爛として我一葦帶水の鄰邦を射れり、幅員我か二十七倍、人口四億の支那は竟に彼れの商權範圍と化すも歟、我貿易家たる者夫れ何を以て内、米國製品の輸入と戦ひ、外、我好市場たる清國の商利を保維せむとする乎、邦家の廢興存亡を決するものは、獨り兵戰のみにあらずして、多くは貿易に在りて存す。兵戰は須臾、貿易は悠久の戰也。一國の經濟を雙肩に荷ふ斯業者たる者、何る憤發湧起せざる、徒に政府の庇護を恃まず、議會の扶掖を希はず、日本國民の輿論を喚起し、借に世界經濟の大勢より打算して自國の經營を確立すへき也。

### 第三 米國の「ツラスト」

現世期の歴史中最も彰明顯著なる國民的進暢の白眉と稱すへきは、蓋し北米合衆國の外交的及び經濟的の政策並に其の結果なるへし、予は之を汎稱して米國か受動的世界主義(パシプ、コスモポリタニズム)の境遇を脱却し一進して發動的世界主義(アクチプ、コスモポリタニズム)を乗るの革新政策と謂ふ、而して此の發動的世界主義は即ち米國に於ける「ツラスト」(信用同盟)の起因なるか如し、米國は七八年以前までは「モンロオ」主義を以て經國政策の金科玉條とし、外、歐洲の國際問題に干與することを避け、内、歐洲列邦の南北亞米利加の大陸の國事に容喙するを許さずとの政畧を以て自國の對外國是となし、復た經濟政策の如きも、此國是と同一の思想より出て、專はら内國工業の振興を圖るか爲め、自國の工業を庇護し、自給自活、獨立の經營を本旨とし、而して自國無盡藏の富源を開拓し、自國の

人口を増殖し、大西洋及び太平洋に於ける長遠にして且つ萬邦無比の海岸線を  
 利用し、沿海及び遠洋の貿易を創振振興せんと欲し、一方に於ては世界の資本、東  
 西の學説及經驗、若くは中外の僑材を網羅聚集するの策を用ひ、又諸種の特權を  
 與へて、宇内の貨殖家、及經驗家を招致して、自國の國民となすの方針を採り、又他  
 の一方に於ては、米國は至寡の勞力を費して最多の報酬を輸し、獲る理想の富源  
 なりと稱して、宇内の勞役者、移住民を誘迎せり。其の結果、全國の鑛山は開掘せら  
 れ、金、銀、銅、鐵、石炭、石腦油等の鑛物及び鑛液、堆積充溢し、水利、海運の便此に開け、牧  
 畜農耕の利彼に起り、最新にして絶大の規模を有せる科學應用の諸機關は悉く  
 具備し、蒸氣力及び電氣は米國の山河を風靡し、運輸業に製造業に其の自然力を  
 擅にし、比年ならずして、山羊野馬の巢窟たりし亞米利加大陸は、忽然として世界  
 至盛の農、工國となれり、而して米國は自國の經濟策に於ては保護貿易を固守し、  
 外國と締結せし條約中には海關稅率を任意に増減伸縮するの權能を掌握せる

を以て、自由自在に外國製品の輸入を防禦阻礙し、以て内國工業の發達を庇保す  
 ることを得たり、世人動もすれば曰く、米國は自國內に於て製造業に關する會社  
 を保護することなしと、是れ一を知て未だ二を識らざる者の言耳、試に想へ、米國  
 は自國內の諸會社に對しては元金の貸與、若くは補給利子の附與を爲さずと雖  
 も、外國輸入品に對し任意的に稅率増減を斷行するを以て、間接に大仕掛に自國  
 の製造會社を保護する所以となるに非ずや、故に其の結果は單に一會社の保護  
 に偏依すること莫く、同一の工業諸會社を均一に保護するの情勢となり、紡績、羅  
 紗、金巾、製鋼、製糖業等の諸會社、蕭然として盛茂隆興するに到れり、是れ米國經濟  
 政策の雄大なる所以也、米國が輒近殖產興業上、英、佛、獨、諸邦の產業史中、未だ曾て  
 見聞せざる、進歩を爲せる所以の事由、一に茲に存すと謂ふへし。  
 夫れ一利一害は數の免れざる所、米國保護政策は一面に於て自國產業の振興と  
 致せしと雖も、他の一面に於ては市場の内訌軋轢を生じ、同業者の實業、競争を醸

し、破産となり、恐慌となれり。此の如き形勢に至りたるか爲、終に「ツラスト」信用同盟の組織は、此經濟界の情弊を匡濟せむか爲に勃興せり。同國砂糖製造會社社長「ハフマイヤー」氏は「ツラスト」の起因を一言の明句を以て辯解して曰く、「Protectio nis the Mother of Trust」(保護政策は「ツラスト」の母也)と言簡なれども、「ツラスト」の原因を説き得て妙なりと謂ふへし。「ツラスト」の組織後、各種の農工業の生産物は國內に於て競争軋轢の虞なく、同一の品質にて又同一の時價にて、始んど全米國に供給せらるるに到りしのみならず、内國の工業品は内國市場に横溢盈滿するに到り、供給已に需要に超越し、六千二百萬人の内國人民の一切の需要に供給して餘りあるの盛況に臻れるを以て、米國の「ツラスト」は内國の市場を席捲し、更に歐洲南亞米利加に其の勢力を逞ふせむと企圖するのみならず、竟に濠洲及び亞細亞の市場、即ち日本、印度、特に支那を以て將來有望の市場と認め、大に經營するの志わが、加之のみならず、米國は近時世界の國際問題に關係するの緊要なること

を借り、布哇、玖瑪、ポートロ、弗律賓諸島等を併合畧取し、漸く其の邦土を擴張し、詩人「キブリング」が歌詠せる「ホワイトマンズ、ボーイ白哲人の負擔」を荷ふて、尙ほ膨脹、進取の發動的政策を踐行せざるへからざるの國勢となれり。

予は此國勢に到れる、否寧ろ此國勢を促致せる北米合衆國民の進取的又は膨脹的政策を汎稱して發動的、世界主義と謂ひ、舊來の政策を稱して受動的、世界主義と謂ふ。然るに米國近時の進取的又は膨脹的政策を稱して帝國主義 Imperialism と謂ふ。人有り、予の觀る所に由れば、帝國主義なるもの、本義は源を英國に發し、現植民大臣「チェームバレン」氏之か主唱となり、英本國及び其の諸植民地間の通商貿易、内政、外交及び軍事的聯合統一を圖るの精神に出でしもの、如し。而して英國前首相「ロオズベリ」卿の如きは、帝國主義とは真正の自由主義、復た愛國心也と釋解せり。是を以て之を觀るも、帝國主義か英國に於てすら異義の定義を有することを知るへし。而して立憲君治國なる英國に於ては、此語を使用すること

を得るも、共和民政國たる合衆國に於ては、之を濫用するは較、穩當ならざるの嫌なきにしもあらざる也。是を以て予は特に發動的、世界主義を辭句を創作し、今日合衆國の進取的、膨脹的政策を汎稱する所以也。

米國の「ツラスト」は發動的、世界主義に淵源するものにして、通商貿易上、工業上、經濟上、業に己に自國市場の獨擅權を掌握し、更に外部の世界、特に亞細亞に向て一大運動を試みむとす。積年の經營、無限の資本、宇内の經驗、近世新式の機械を利用して、極東の商權を把握せんとす。其の勢壯、猛偉、烈、千仞の積水を決するが如し、滂薄、洶湧、横流、逆折、其向ふ所、誰か能く之を防止することを得ん。

米國「ツラスト」の將來、夫れ斯くの如き宏大なる餘波を及ぼすものなりとせば、今日に於て其の由來、現狀、利害、外國貿易との關係、又日本の經濟界と「ツラスト」の將來の如き問題は、我等日本國民、か宜しく精覈深考すべきもの也。

米國政府は「ツラスト」組織の盛に行はるるか爲に其の利害を調査するの必要と

認め、二十七名の調査委員、即ち上院議員九名、下院議員九名、大統領の指名に係る九名を選任し、之れが査覈を命せり。予は明治二十五年漫遊の後七ヶ年目にして、昨夏米國に巡遊せしか、予が親友なる「コルキル」大學教授「ジェンクス」氏の如き、其の顧問たりしか故に、予は氏に就て「ツラスト」の由來、並に現況を詳にすることを得たり。調査委員等は當時已に審査中なりしか故に、其の報告は昨年中には公にせらるゝことを得しなるへし。

夫れ「ツラスト」組織が由て來りたる所を討尋するに、全く米國に於ける數十年間の事業の進歩より發生したるものにして、其要は同業者の競争の爲め、商品の價格を賣り崩し、又多額の賣捌費を支出し、多數の社長、支配人、技師及雇員を使用するの冗費等を要する弊害を除き、以て數多の同業を結合し、競争を制止し、數多に分裂したる工場を合同し、無用の經費を節減して専ら唯一の命令の下に大工業を指揮し、多量の同質商品を製造するに在り。其起源は是れ南北戰役後に於ける

國民の起業心盛大に赴き、各種の會社發生して同業者間の競争を避くるの目的に出でたるものにして其最も古きものは千八百七十二年の交也。當初は其の勢力極て薄微なりしも、一千八百九十三年に至り、其の組織の利益一般に認められ、異常の進歩を爲し、刻下法律に由り認可せられたる農工商各般の「ツラスト」の數約五百、其の資本總額六十億弗乃至八十億弗ならんと云ふ、其の他法律上認許せられずして全く同業者間の祕密的「ツラスト」なるものも亦蓋し五百内外にして其資本額の如きも五十億弗乃至七十億弗を下らざるへしと云ふ。而して法律に依り公認せられたる工業上の「ツラスト」の數を調査したるに昨年六月末の調査に由れば其數百三十一にして資本總額三十一億弗なり其の内最も舊るきは一千八百七十二年の創立に係る「スタンダード・オイル・ツラスト」にして九千七百二十五萬弗の資本を有し、又最も大なるものは「レディング無煙炭」ツラストにして其の資本金一億五千萬弗なり、然るに更に之よりも大なるものは、昨年七月頃の

成立に係る「ピットバーグ」の「カーネギー鋼鐵會社」にして其の資本金六億二千五百萬弗の巨額に達せり。

「ツラスト」組織の目的は當初内國に於ける同業者間の競争を回避するに在りしか、今や海外に向て輸出貿易伸張の唯一手段となり、内國の事業より收むる利益を割き、之を海外貿易の競争に關する經費とし總て外國の販路にして他邦の競争ある商品に對しては、豫しめ一時の損失を賭して、抗戰を試み、其の對手を僵さすむは止まざる也。「ツラスト」は常に此權道を利用し海外の市場を席捲し、今や海外貿易伸張の最要至強の機關となり、而して米國の輸出貿易は最近十年間に三倍に増進し、千八百九十八年の如きは前年の輸出總額に超過すること六億一千五百萬弗に上り、輸入總額に比して輸出總額は殆ど之に倍蓰するに到れり。斯くの如く「ツラスト」は海外貿易をして盛大ならしむるの効力あるを以て、其の組織は日に月に滋、其の數を増し、其の同業の範圍及び種類愈々靡大多種となるの勢あり。

本來「ツラスト」の組織は生産業者の團結にして互に競争を避くるに在り。故に其の極、各生産業は獨占業となれり。而して獨占業特有の弊は價格の増加を勝手にし、商品を改良するの遲緩なるにありて、小は消費者、大は社會の不利を致すことなるか、今「ツラスト」組織後の實況を観るに、原料買入に毫も競争なく、復た賣捌の費用を減するが爲め生産物の品質は改良せられ、價格低廉にして、消費者に對し、便益を與ふること頗る大なり。然りと雖も「ツラスト」の氣勢斯くの如く熾なるを以て、其の成立極て多く、又極て速也。而して成立の速なるものは消滅も亦速かなるべく、若し一朝「ツラスト」の失敗に歸したらむには、米國の經濟社界は幾むと其の根柢より崩壊すへき恐有り。且つ「ツラスト」組織は本來純粹なる經濟的新形式たるものなるも、其の勢力の偉大なる、竟に經濟的範圍を超越して政治的範圍に侵入するに至り、政治上の諸機關を買収して自己の爪牙とし、中等社會の起業家

を剷滅して、産業界の專制的勢力を扶植するに至るやも計り難し。故に「ツラスト」組織は其の盛大を致せる今日に於て、利あると供に又害あることを顯はし、其の組織の利害を謂ふ者自から二派に分る。「ツラスト」の利を認むる者は主唱して謂らく、凡そ經濟の伸張するに際しては小會社割據の姿を呈出し、資本の聚合統一を缺き、産業の革新進展を致すこと能はずして、却て競争軌轍を醸成するもの也。是れ「ツラスト」てふ信用同盟組織なきより生ずる常弊とす。請ふ左に「ツラスト」の利益を列舉せむ。

- 第一 小會社又は小工場の分裂割據の弊を匡濟すること
- 第二 營業の競争より生ずる同業者間相互の損失を省減すること
- 第三 多數の小資本を糾合統一して大資本を運轉使用すること
- 第四 適任なる社長及技師を選抜し唯一の命令の下に大工業を指揮し多量の同質商品を製造し得ること

第五 製造又は營業經費を節減して製造品の價格を低廉にすること

第六 全國內を通し本社と支社との連絡を密接にして營業の方針を同一にし以て取引を敏活ならしむること

第七 内國に於て同業者間の競争なきを以て専ら海外貿易の伸張に全力を聚め外國の商品と競争して終局の勝を制すること

然るに「ツラスト」の弊害を説く者復た多少の眞理を有し頗る聽くべきもの有り。則ち左に其の概要を約述すへし。

第一 産業上又は經濟上に於ける專制的の勢力を構成すること

第二 政治上の諸機關を買収して自己の爪牙と爲し専ら一個の私利を營み國利民福を顧みざること

第三 大資本の專制力を濫用して小資本を併呑し中等社會の人士か企圖する新起業を阻礙抑壓すること

第四 商品の製造を獨占するか爲其改良を計らす自由に其價格を増減して消費者を困厄せしむること

第五 株主は社長以下役員の專斷を掣肘すること能はず又株主の意見を有効に發表すること能はざること

第六 株主名簿財産目錄の如きは社長及役員の外は之を示さず從て株主は之れか配布を受くること能はざること

前述の弊害中其の大なるものを詳論せむに「ツラスト」が産業上に專制的勢力を構成する所以のものは一切の營業を擧げて少數の重役に信託し株主名簿も會計決算も渾て之を秘し普通の株主は毎年定期の利益配當を受るの外は内部の組織及び事業の經營等は窺ひ知ること能はず是を以て重役なる者は全く專制國の君主に等しき權能を掌握す。又小資本家の如きは所詮孤立して之と對抗競争すること能はざるを視止むことを得ずして之に加盟す。一旦之に加盟せむ歟

帳簿検査を覓むるも、重役は峻拒して之に應せず。之を法廷に提訴せむ歟、曠日彌久、力屈し意阻み、竟に長きものに卷かるるの俚諺の如くならざるを得ざる也。ツラスト」が經濟社會に一種の專制的勢力を助長する所以のもの、洵に茲に伏す。次に「ツラスト」は嘗てに獨り經濟社會に魔力を揮ふのみならず、進て政治社會をも軟化せしむる傾向を生せり。ツラスト」は已に上下兩院の議員を操縦して其の羽翼となさんとしたることあり。米西戰事費の爲め新税を日本、支那、印度より輸入する製茶に課せむとする時、彼我の權衡上咖啡にも課税するは至當の舉措にして、當初何人も之に對して異議を挾まざりしと雖も、一たび咖啡「ツラスト」が反抗運動を試むるに至てや、其議は忽ち消散し、一方に於て輸入茶には重税を課しなから、佗方に於ては、輸入咖啡は依然として舊に縁て無税としたるか如き、其の勢力の偉大なるを證して餘あり。

然りと雖も「ツラスト」と外國貿易との關係を視れば、「ツラスト」が前述の弊を償ふ

て尙ほ餘あるほどの巨利鴻益あるを認めざるを得ざる也。予が紐育淹留中の事なりき、米國が鐵軌を東洋諸國に賣込まむとするや、英、獨、諸邦と競争せざるを得ざるに到り、米國製鐵業の「ツラスト」は豫め多額の損耗を見込み鐵軌一噸に付特別東洋諸國賣込の相場は本國の相場より十弗内外の廉價とし、一時の損失に堪へ、以て終局に於て英、獨の競争者を壓倒せんと企てたり。而して當時米國の鐵道諸會社は此の製鐵「ツラスト」が東洋諸國に於て此の如き低廉の價格を以て鐵軌を賣くことを得るものとせば、自國の鐵道會社に向ても東洋諸國賣捌の代價と同一の取引をなすへしと主張し頗る不滿の意を漏らせり。然るに「ツラスト」之を聽き且つ慰藉すらく、是れ海外に於て佗國の競争者を壓倒し、彼等の製品を驅逐して我が製品を販賣し、以て市場獨擅權を永久に掌握せむか爲め、須臾の間損失を忍び廉價に販賣する所以に外ならず。又東洋に於て一時價格を低廉にせしは、全く「ツラスト」の商畧なり。然れども本國の消費者たる鐵道會社に對しては從來



販賣し來りたる代價より高く賣捌きたることなければ自國の鐵道會社は之れか爲め毫も損失する所なし、且つや日本及支那兩國の如きは將來に於ける我會社の大華主也、今日破格の廉價を以て取引を爲さば、異日我には毫も競争者なくして此大華主に對する總ての供給を獨擅するに至るへし、其の畫策運籌一に我等の方寸の裡に在り、故に刻下外國競争に對應する施設の如きは、請ふ暫らく黙視せよと、現に一昨年米國に於て新聞用紙一封度の時價米國貨幣貳仙、即ち我が四錢強にあたりし時、我東京に於て同一の洋紙一封度を我五錢に賣渡し、運賃荷爲替料等の費用は凡て彼に於て自辨せりと云ふ、其の佗支那に於ても、洋紙雲齊織、鐵、麵粉等は、米國の輸出品極て廉價にして、英獨諸國の到底競争し得る所にあらざりき、是を以て在上海英國領事は本國政府に報告して曰く、米國の「ツラスト」は我英國か四十年來占有せし支那貿易の範圍を蠶食せんとする傾向を顯はし、雲齊織貿易の如きは、既に渠れの畧取する所となれりと、其の勢力の壯猛勁烈

なる、以て想見すへし。

之を要するに「ツラスト」の利害得失に關しては、歐米の政治家、經濟家及學者間に於て各々其の説を異にす、現に合衆國に於ても各州其の規定を一にせず、テキサス州の法律は全然之を禁止し又、ニュージャージー州の法律は之と正反對にして全然之を許可せり、又某州の法律には禁止の明文なきも、其の成立條件を嚴にし、幾ど禁止に等しき干涉を行ふも有り、故に「ツラスト」を組織する者は、其の名義上の所在地を多くは、ニュージャージー州に置き、其事業は佗州に於て實際經營するもの極て多し、予を以て之を觀るに、「ツラスト」組織なるものは其の學說に於ても、其の實際に於ても、其の利害得失紛紛として明かならず、而かも其の範圍廣大、其の勢力雄偉にして、政治、經濟、貿易、及び外交に關聯するを以て、今年施行の大統領選舉の如きは、「ツラスト」を提げて其の輸贏を決する政綱とし、米國の二大政黨中、「レパブリカン」は此組織を保護せむとし、「デモクラット」は之を禁遏せむとし、激甚

なる運動を試みるならん

將來我日本帝國に於て「ツラスト」の成立を許容する乎否は實に經濟上の一大問題にして今日輕々に之を論定すべきものにあらざるなり、然れども世界工業の歴史を觀察するに最初には毎戶の工業に依り各種の商品を製造し、中頃には機械工業に移り多量の物品を同一の品質に製造し、終りには各地散在の工場を同一の組合となし以て内外に於ける商品需用に供給するの組織となしたり是れ即ち「ツラスト」信用同盟にして目下米國に於て尤も有力なる工業の組織なりとす然るに我日本國の工業の状況を觀察するに工業の大部分は尙ほ未だ毎戶の工業に止り而して或る工業の如きは已に機械工業の區域に進入したるも其規模極めて狭少なるを如何せん、故に同業者間の競争激甚にして内外に於ける工業の方針未だ確立せず、資本は粉碎したる小資本に分割せられ製造物の品質は區々にして一定せず到底海外に向て貿易を擴張するの基礎を構成せざるなり

此時に當り太平洋を越えて對岸の米國に於ける工業の形況を見るに「ツラスト」の區域及勢力は年々増進し己に全國を通して「ツラスト」の權勢の範圍内に包含し内國の市場に於ては外國の輸入品を驅逐し己に或る商品に就ては極東の市場に於て英獨兩國を壓倒せるを以て爾今益々其の勢力を扶植するの方策を探りつ、あれは將來日本の工業の一大敵邦となるや毫も疑を容れざるなり況んや我國將來の好市場たる一葦對岸の清國に於て商權爭奪の戦近きに在るに於てをや、己に商戰の止むなきを知る、何ろ直往挺進全軍歩武を整へ、一定の規律の下に立ちて、軍隊的行進を斷行せざる、苟も軍隊的行進を行はむと欲せば、必ずや大合同大規模の「ツラスト」組織に緣らざるへからず、而して商權爭奪の戰場に馳驅し、他國と競争するには一時或る局部若くは全部に於て鉅額の損失を忍ばざるへからざることあり、若し今日の如く小規模の工業ならむには縱令一時の勝利を得るも到底將來に於て、之と競争するの實力なく、所詮長きものには卷かる

この窮境に陥らざるを得ず。之に反して苟も大規模の工業、即ち「ツラスト」組織の形式を採り、資本を聚合し、機動を敏活にし、製産力を洪大にし、價格を低廉にし、目的を遠大にせば、内、外國の輸入品と競争して勝算の見込あるのみならず、外、海外市場に自國製品輸出の立脚地を鞏固ならしむることを得へし。是れ予か我國に於て「ツラスト」の組織を移植するを可とし、國民經濟並に海外貿易伸張の主旨より當業者に於て之を組織するの勇あるべきことを論明する所以也。

日本に於て「ツラスト」を組織する方法如何、予思ふに刻下基礎堅鞏なる同業組合の如きは、誘導其の道を獲れば、直に各業の「ツラスト」を成立せしむることを得へし。己に「ツラスト」を成立するに足る幾多の資本ある同業組合あり、又其の成立を促致すべき氣運、並ひ存すと雖も、同業者總體の輿望を繋ぎ、深識活才、忠良公正、以て中外經濟の現況を知り、事業と資本とを信托せらるゝに足るべき實業界の俊傑幾人歟ある。予の深憂とする所、洵に茲に在りて存す。幸に我國に於ても、夫の

米國に於ける石油業の「ロックフェラー」氏の如き、製鐵業の「カーネギー」氏の如き、若くは製糖業の「ハプマイヤー」氏の如き、其の實業界に於て全國第一位に居り、十目十指の齊しく視指する所となり、同業團體の總理となる人ありて、維精維密、斯業に就ては、國利を先にして私益を後にし、而して、各種の「ツラスト」も亦相互に氣脈を通し、供に提携して海外貿易を經營し、其の通商區域を擴張し、帝國の利益を暢舒せば、既往並に現時一個人若くは一會社か特立孤行の運動に甘したる日と自づから面目を一新するに到るべきや、炳焉として夫れ章か也。

#### 第四 尼加拉加運河

北米合衆國設計中の一大事業たる尼加拉加運河に就き、其の主眼の目的、工事計畫主權確定上の困難、經濟上並に軍事上に及ぼす結果を概論すへし。

夫れ尼加拉加運河は南北亞米利加の間にある一帯の地峽を開鑿して一道の運河を作り、以て大西洋と太平洋との航路を接続し、歐羅巴と南北米の西海岸との通商貿易、及び南北米東海岸と亞細亞との通商貿易を敏活隆昌ならしむる世界至大の捷路也。今試みに紐育、橫濱間の航路に依り之を證明せんとす。現今に於ける、マニラ運河通過の日米間の貿易は紐育より大西洋を航過し、地中海及印度洋を通過し、橫濱に達するものにして、其哩數は一五、一四〇哩とす。然るに尼加拉加運河完成後、其航路に依れば紐育より該運河を通過し、布哇に寄港の後、橫濱に達するものとなりて、其哩數は僅に一〇、四一四哩となる。故に新舊二線の航路を比

較すれば實に三分一を短縮するものとす。故に此運河は獨り經濟上異常の變化を世界萬邦に及ぼすべきのみならず、復た外交上、軍事上及び文化上、眞に東西兩洋近接融合の衝路に當るを以て、將來宇内萬事の燒點となり、自他交通の要關となるべし。抑も此運河問題たるや、數年前より一たび巴拿馬地峽をトシ開鑿せらるべしと傳へられ、佛人「ド、レ、セブ」の死後、一時忘却せられむとせしも、近年北米合衆國が更に地を尼加拉加地峽に相し、運河截通の計畫を爲し、其の調査委員を選定するに及び、大に當代の耳目を聳動するに至れり。其の調査委員は海軍少將「ウオカア」陸軍工兵大佐「ヘインズ」天學教授「ハプト」の三人の外、當世知名の人士を以て組織し、其の事業經營及び費途を查覈せり。而して合衆國議會は一昨年會議中、一百萬弗の調査費用支出を協賛せり。本問題の決定する以前に於て、調査委員等は氣候、地理、地質、其の佗此計畫に必要な諸種の材料を精査し、此運河は充分完成の見込あるものと評決せり。今其の設計の概要を約述すると左の如し。

尼加拉加運河開鑿工事は太平洋海岸なる「ブリトウ」港より起工し、漸次東方に向て工事を進行し、尼加拉加湖の西端「サン、パプロ」に出で、更に該湖の東角なる「サン、カアロス」より東方に向て進行し、「グレートン」港に達して、竟に大西洋面に出づる者なり。更に其の工事を詳説せむに、「ブリトウ」港より東方七哩の間は「リョグランデ」河の流域にあり、此地勢は西に向て傾斜し、一哩に付十呎の勾配を有す。此地方は多少耕作地たりと雖も、多くは茂林相連り、運河經過の徑路中、最も富饒の地たり「リョグランデ」河の流域を過ぎ、東に走り、尼加拉加湖に出づ。其の間里程十哩也。地質多くは巖石にして、地層六呎の下は概ね巖石を以て組織せられたり。而かも其の岩質たるや、軟弱にして之を開鑿するに難からず。此地方は運河の經過する土地極て狹隘にして、兩岸多くは山脈の麓に近接せり。尼加拉加湖は、高峻なる山上に停蓄せられたるものなるか故に、其の水を東西の運河に利用するの目的を以て設計せられたり。該

湖は東西百哩、南北四十五哩にして、面積三千方哩あり。至深の所は二百呎とす。運河の東口と西口との間の距離は湖水の水面七十哩とす。而して湖水は最も航走に適すと雖も、東隅に於ける十三哩の間は、水底淺さか故に浚渫の必要あり、而かも地質毫も浚渫に困難を感せしむるか若きとなし。尼加拉湖を経て、再び運河に入り、専らサン、ジュワン河を利用して東進す。該河は長さ百二十哩に亘れり。乃ち尼加拉湖の出口よりサン、ジュワン河の流を追ふて下りサン、カアロー河の合流する處まで、全く河流に由て運河の實を擧ぐるものとす。調査委員の報告に據れば、サン、カアロー河の合流する處より以東は運河とサン、ジュワン河の河水とを區劃し、同河と分離して新に運河を開鑿するの計畫とす。是れ蓋しサン、カアロー河の河水氾濫膨脹を避くるの目的より設畫せられたるものなり、而して該處以東は純はら人工の運河に由り、大西洋の海岸に於ける「グレートン」港に達し、始て大洋に出て以て、太平

洋及び大西洋の水をして人為的工事を以て疏通せしむるものとす。此運河の延長哩程は百八十九哩十分の九、水深三十呎、幅百呎、但し場所に依りては百五十呎乃至三百呎に上下す。其の幅は現時航海する所の船舶の船幅を標準として定めたるものなれども、造船術の發達に伴ひ、二十五年乃至三十年後は、運河の幅及び深等は船體構造の變遷と共に擴張せざるを得ざる必要を感ずるに到るなきを保せざるを以て、豫しめ後日之を擴張するの餘地は充分備へられたりと謂ふ。而して運河開鑿工事費は、海軍少將「ウォーカー」及び大學教授「ハプト」の計算に據れば、一億千八百萬弗、工兵大佐「ヘインズ」の計算に據れば、一億三千五百萬弗とす。然れども普通技術家間に唱道せらるゝ所に據れば、一億二千五百萬弗にて十分なるへしと謂ふ。是れ後日著手の後に至らざれば確定すること能はずと雖も、先づ各種の見込に由て算定せられたる所は前記の三種とす。

前述の工事概要に由り、尼加拉加運河は、學術上開鑿するに難からざるとは、既に確定し、又た費用の如きも、前記三種の計算に依り、稍見込付きたるを以て、北米合衆國政府は、昨年冬期の議會に於て、此調査の結果を報告し、如何なる方針に依て之か開通を計畫實施すへき乎に就き、議會の協賛を求むるに到るへし、然りと雖も、此運河問題に就き困難なる事項は、技術上にあらず、將た經濟上にあらずして、實に左の二問題に在りて存す。

第一 尼加拉加若くは古斯多里加の政府に於て從來會社又は一己人に與へたる特許若くは締結したる契約を解除し、又は買收して運河開鑿の全權を一手に專有するに非らざれば、此運河開鑿に着手すること能はず、從て其の解除又は買收に關する費用の如きは、其の交渉談判の如何に由り、或は多額を要し、或は相當の價額を以て之を完結することを得へきものとす。

第二 千八百五十年英米兩國間に於て締結したる「クレイトン、ブルワー」の條約

に據れば、

(一) 英米兩國は亞米利加大陸に於ける地峽に於て運河を開鑿するものに対し、他より不當の沒收、捕獲又は行爲をなさんとするものあるときは之を保護するに付き共同の責に任す。

(二) 英米兩國は此地峽に於ける運河完成後は、他より之を沒收、掠奪、又は妨害するものあるときは、之を保護し、又運河に於ける安全なる通過を保證し、若くは之に投入したる資本を安固ならしむるよとを保證するの共同責任を有す。

(三) 英米兩國間に於て戰端を啓きたる場合に當り兩國の船舶は捕獲、拘留せらるることなし。

(四) 英米兩國は此運河に對し單獨に監督權を有することを得ず、復た此運河を監守する爲め單獨に砲臺を築造することを得ず。

故に「クレイトン・ブルワー」條約の明文に據れば、北米合衆國政府に於て此運河を自國の全權に歸せしめむとする政策は全く該條約に違背するものとす。而かも之を史乘に徵するに「クレイトン・ブルワー」條約なるものは由來北米合衆國人民か外交上の舉措に於て歐洲列邦に對し一籌を贏し獲たるものなりとて近時まで自負自矜せし所のものなりき。蓋し該條約は千八百五十年四月十九日、英米兩國の間に於て締結せられたるものにして、當時は墨西哥戰亂新に終り、歐洲列邦特に英佛兩國は漸く亞米利加大陸に指を染め、植民通商等の經營を試み、巴那馬若くは尼加拉加地峽を開鑿し、大に爲す所あらむとするの勢有り、合衆國は夫の保守的、理想的の「モンロオ主義」より之を視、歐洲外邦の亞米利加大陸に干渉するを峻拒嚴排するの急要なることを認め、直ちに該條約を締結し、英國と聯帶して、地峽開鑿運河の保全を擁護せり。爾來米國人民は之を以て外交上至大の勝利なりとて誇揚せしか、今や自國の國力盈實し、國利範圍伸張し、受動的、世界主義

を擲て發動的、世界主義を採るに至り、通商、外交及び軍事的進展の爲め、尼加拉加運河を開疏し、單獨に之を擁護、保有するの急務なることを識り、始て曩きの「クレイトン・ブルワー」條約が自から自國の行爲を羈縛するの鎖鎖なるを悟りたり。予惟ふに「クレイトン・ブルワー」條約は恰も我安政八年、徳川幕府が米穀金銀の輸出を國憂とし、五分の關稅を賦課し、自國輸出貿易の發展を阻礙せし政策と同一の損失を致せり。其の迂愚にして自から播けるものを復た自から蒞らざるを得ざるに到りしと雖も、古今に通して錯らざるの良策なく、唯時運の革易變遷に伴て國是を樹立せざるへからざることを知るに足る。今や米國人士中には此條約を改正する方法として各種の手段を探り、或は之を破棄するの言説を唱ふる者あり、「フレイン」、「フレリントン」、「グロビンセン」及び「エバート」の如きは、該條約を以て既に服従の効力なきものと主論し、或は英國政府に向て條約改正の談判を開くへしと提唱せり。然りと雖も、英國政府に於て容易に合衆國の要求を容れ、從來占



有せる所の此運河に對する既得權を抛擲し、全然運河管制權を米國政府に讓與するや否は、何人と雖も其の將來を豫見すること能はざるへし。蓋し尼加拉運河にして北米合衆國の主權の下に歸するに至らば、第一英國の保管の下にある蘇士運河は直に經濟的影響を蒙るへし。第二、通商貿易の點に於て、亞米利加東海岸をして英國及び其の佗の歐洲列邦よりも距離に於て亞細亞大陸及び太平洋中の諸島に近邇せしめ、隨て前者に商權を奪はるへし。第三、海軍戰畧の點に於て、北米合衆國に戰時該運河通航權を獨擅せられ、墨西哥灣、キヤリビヤン海は勿論、太平洋東部の海上權力を管制せられ、不測の禍殃を與へらるへしと認むるは、必至の數なればなり。故に尼加拉運河問題の難關は技術上にあらず、將た經費上にあらず。一に「クレイトン、ブルワ」條約の効否存廢に關する英米兩國間の外交談判に在りて存す。而して米國現時の形勢に依り之を觀察するに、米國は既に植民政策並に國土膨脹の方針を乗り、宇内至強の班に列する諸國と幾多の國際

的關繫を生し、將來滋、世界總局の問題に觸接すへし。今や大西洋に於ては、新に「ポルトリコ」及び「玖瑪」を西班牙より讓與せられ、太平洋に於ては布哇を併合し、復た菲律賓諸島を西班牙より收容し、而して東西の兩大洋に於ける植民地を聯貫保全する爲め、尼加拉運河の必要を感せり。現時米國の聰明なる輿論は、内國に於ける農、工業の伸張と俱に自國製產物輸出の急務なることを悟りたるを以て、何等の障礙を排除しても、該運河を開通するに非らざれば、米國現時の地位と勢力とを保維すること能はずと云ふに歸一せり。故に此運河問題たるや、次期の議會に於て調査委員の報告と俱に一大問題となることは、予の深く信して疑はざる所なり。今假りに一步を進め、英米兩國間の外交談判にして圓滑に終局を告げ、合衆國政府に於て單獨の經營事業と爲すに到らば、米人の技術の巧妙と資本の盈實とは此運河を疏通開鑿するに餘あるや彰也。然りと雖も米國海軍大佐馬鴻氏が辯破せるか如く、該運河竣成後は米國太平洋岸を暴露して歐洲海國の艦隊

の攻撃を蒙り易からしむる虞あると俱に、墨西哥灣及び「カリビアン」海の海上權力主管の必要に驅られ、現存海軍を増勢すへきは勿論、運河西岸地方に於ける土民の妨害若くは不時の騷擾を鎮壓する爲め、常に運河兩岸の要地に常備兵を駐屯せしめ、世界萬邦の船舶をして自由且つ安全に之を通航することを保證せざるを得ざるなり、然らば則ち米國の陸海軍の制度も亦此運河開通と同時に從來の方針を一變し、常備軍を設置するの計畫を樹立せざるを得ざる也、之を要するに、尼加拉加運河は北米合衆國の外交、兵備及び通商貿易の上に於て至大至要の國家問題にして、其の經營並に完成の如何は直に宇内の大勢を一變するに至ること、爛として夫れ日星の如しと謂ふべきなり。

## 第五 太平洋海底電信の敷設

現時並に將來に於ける列邦の爭點は夫れ一に時間タイムに在り、甲兵の精ならざるは、尙ほ教練すへし、艦艇の堅ならざるは尙ほ改造すへし、資本の盈滿ならざるは尙ほ増募すへし、藝靡振はざるの貿易は之を匡擠すへく、技術巧ならざるの工業は、之を教養すへく、舉措宜を失へる外政は、之を改善すへく、冥頑無靈、道なきの國民は之を利導教化すへし、然りと雖も時間の點に於て他邦の爲に一たひ機先を制せられむ、故に千秋萬古、再ひ恢復すへからざる深創を蒙り、國利減し、國權墮ち、國運も亦傾くに至るへし、邦を洋心に樹て國際政局の中樞に位し、雄を宇内の盟國と競はむとする我日本帝國國民たる者は、近世的邦國の成敗興廢の主因は、眞に時間タイムを制すると否とに由りて成るるものなることを悟り、至適の時期に於て至良の設備を決行せざるへからず。

東西兩半球の鍵鎖となり、外交、貿易、經濟、及び軍事問題の焦點となるべき天與の地位を獨擅せる、我帝國は今日果して時間を制するの利器を具備する乎、若くは具備するの急要なることを確認せる乎、利器とは何ぞ、曰く舵なし、太平洋海底電線即ち是なり。

試に世界の海底電線全圖を披見するに、大西洋洋底に於ては歐米兩國間には三重線二條及四重線一條敷設せられ、波里波機<sup>ハリボツ</sup>及び紐育間に複線一條、富呂利陀州<sup>フロリダ</sup>より玖瑪諸島を経て南米に於ける英領給亞那<sup>ギブナ</sup>に到る單線一條あり、英國より西班牙里斯本を経て南米伯西に至る複線一條あり、亞非利加大陸の如きは、大西洋より地中海並に紅海面より更に印度洋面に於て、單線若くは一條以上の複線に由り、全く圍繞せられたり、北部及び東部印度洋洋底に於ては、三重線若くは複線に由り、印度、新嘉坡及び濠洲を聯繫せり、更に西部太平洋洋底に至ては、新嘉坡、檳香港、上海、及び浦鹽斯德の諸海港は單線、若くは複線に由りて一申せられ、唯我

長崎のみ其の一端に接觸せり、要するに歐米の海岸諸大都是勿論、亞非利加、印度、濠洲及び南清、亞露の諸海港は、海底電線に依り連珠列星の如く通貫せられたりと雖も、太平洋の大部分、即ち英領加奈陀、北米合衆國の西海岸、南米の西海岸、濠洲の東海岸及び日本海岸を洗ふ所の大洋洋底には、未だ一條の電線たも敷設せられず、此の太平洋沿岸の諸國之か爲に、其の外交、貿易、經濟、軍事、内政、宗教等に關する相互の事變を直接に峻速に閉知することを得ず、唯總に、佐の三大洋洋底を奪る電線に由り、極て間接、極て迂遠、極て遲緩に遞傳せらるるの外なし、特に我日本の如きは、唯一條の外國所有海底電線に依り、世界萬邦中、幾んど最終に歐米及び亞非利加大陸の諸大事變を閉知するに過ぎず、詳言せば、日本は時間の點より謂ふも印度、濠洲若くは支那よりも遅く世界の電信に接し、經濟の點より視るも多額の電信料を消費す、電信料の高價尙ほ忍ぶへし、遲電の結果恒に他邦の爲め外交、貿易、海戰々畧等に於て機先を制せられ、國利の喪失を來らしむるに到ては、竟

に忍ぶへからず。

七十四

由來太平洋洋底に一條の海底電線の敷設なきは、自然の障礙物あるか故也。語を換へて之を謂へば、幅員五千海里に亘り水深三千尋乃至五千尋に達する太平洋の水、日米の間に澎濤すると、日本の東南に當り「タスカロラ」と稱する海底の陥落ありて其深さの如きも未だ詳知せられざるか故也。然りと雖も我日本は字内の大勢と接觸し、殊に歐米列強の風潮と馳騁せざるを得ざる状態に立てるを以て必ずや躬から憤發して自然の障礙を制するに、人智及び人力を以てし、自國資本若くは佗の數國との合資に依り、太平洋海底電線を敷設せざるへからず。

現時日本か合衆國よりの電報に接受するには最も長遠迂回せる二條の電線中其の一に憑依せり。北方線及び南方線即ち是れ也。試に北方線に由り、米國桑港より我東京に發電せんに、該電信は桑港より紐育に到り、大西洋を横過して露都聖彼得斯堡に奪せ、更に歐露及び亞露を経て、浦鹽斯德に達し、日本海海底を通して

長崎に來り、以て東京に遞傳す。今南方線に由り、桑港より東京に發電せんに、其の電音は英京倫敦に到り、地中海、紅海及印度洋洋底を駛せ、新嘉坡を掠めて香港に出で、上海を経て、始て長崎に來り、然る後其目的地に達す。而して逆に東京より桑港に發電するも亦同一の線に由り遞送せらるるものなり。假りに赤道の下に於ける地球一周の距離を整數一とせば、桑港より日本に來る南北兩電線は約五分の四に庶幾し、然るに今若し太平洋洋底に敷設するに至らば、一周距離の約五分の一に止り、五分の三短縮するを得へし。又た北方線に由り、發電せらるる桑港、東京間電報一語の賃金は參圓五拾八錢、其の到達時間は約三十時間也。南方線に於ては一語につき四圓參拾八錢、其の到達時間は畧は前者と同じ。一昨年中日本より發電せし電報總數貳萬餘通、其の語數約貳拾萬にして、一語參圓五拾八錢宛にて通算せば、發信料總計七拾壹萬六千圓の金高に上る。若し太平洋海底電線敷設せられなば、其の距離は南北兩線の五分の一に過ぎざるを以て、時間に於て五

分の三を減少するのみならず、發信料も亦五分の三を減少し、即ち六時間にて到達し、發信料僅に拾四萬參千貳百圓となるの比例也。予は固より斯學の専攻家に非らずと雖も、新線か舊線に比し、時間並に經濟の兩點に於て僭に莫大の利益を占むべきとは、斷言して憚らざる所也。既に太平洋沿岸の諸邦及び其の洋心にある日本は、宇内將來の至大至重の商業區域とならむとするの兆候炳乎として明かなるの秋に方り、歐米列國の諸商業中心の形勢を峻速に知悉するの急要滋く加はるの時に方り、復た世界の一隅に崛起する事變か直に我貿易市場に餘波を及ぼすか如き情勢となり、宇内萬邦の市場宛なから一個の有機體の如くなれる現時に方り、我帝國殖産興業の發展伸張上、最も急要なるは眞に太平洋海底電線の敷設に在り。

想ひ起す、明治二十二年七月の交、予か官命を奉して北米合衆國に巡遊するや、彼國の俊雄なる經世家にして當年外務大臣の顯位にありし「ブレイン」氏を「メイン」

州「バーハーバー」の別業に訪へり、當時適、支那に於て宣教師襲撃の奇殃生し、華盛頓と北京との兩國政府間に外交上の交渉ありしか、氏は予に語るに、氏か北京駐劄合衆國公使に長文の訓電を發せしに、其一通の發信料六千弗に上れり、斯くの如き鉅額の發信料は之を以て嚆矢とす。是れ一に米國と亞細亞との間に太平洋海底を奪る捷徑の電線なきに基因す。故に米國人は將來此の大事業を完成せざるへからざる旨を以てせり。歳光流るゝか如く、會見後業に已に十稔の星霜を経て、氏も亦黃泉の下に永眠すと雖も、其言辭今猶鏗鏘として予か耳に在るか如し。予か知友にして「ミカドス、エム、バイヤ」等の著述を爲せし「グリフィス」氏、其の近著「東洋に於ける亞米利加」(「America in the East」)を贈られたり。嘗中合衆國人か第十六世紀より既に太平洋及び北氷洋の探險測量に志を懷き、南北戰役までは、將來世界唯一中樞の大洋たる太平洋の測量に於て、萬邦に率先したることを記述せり、其の辭に曰く、

「太平洋洋底を査覈し復た製圖することに於て、其の水深を錘測することに於て、其の潮流、海流及風路、大氣並に水の顯象を發見することに於て、將來の海底電線を敷設すへき海中高臺及谿野を測量することに於て、太平洋中の諸島の位置を精確に照檢指定し、其の陸標を測定することに於て、復た北氷洋に於ける智識を蒐集することに於て、米國人は南北戰役までは、世界萬邦に後れを取りしこと莫し」と。

予の視る所を以てすれば、米國人は南北戰爭終局後と雖も、克く既往の志を紹繼し、太平洋海底電線敷設の計畫を工夫せるもの、如し。一千八百七十年渠等が計畫せし線路は桑港を起點とし、陸路亞拉斯加を過ぎ、白令海峡を経て露領亞細亞を南下し、日本海を涉て我國に到達するもの也。爾來一千八百七十九年、一千八百八十四年、一千八百九十二年、一千八百九十五年まで前後四回、之に關する諸般の調査に従事し、海流、海底、溪野等の自然障礙物の爲め、幾たびも其の經由すへき

線路を變易せり。明治二十二年即ち一千八百八十九年予が「バーハーバー」に於て「フレイン」氏と會見せし際の如きも、氏は太平洋海底電線敷設を以て、北米合衆國、布哇及日本三國の共同事業とすへしと唱道せり。予は其の事業が將來極東總局の公益なることを以て、歸朝後、我政府當局者に報告する所ありたり。

今日まで合衆國人若くは加奈陀政府が設計せし太平洋海底電線は前後四種有り。吾人は其の線路及び其の得喪を研窮し、日本帝國政府若くは人民が施設せざるへからざる所以の道を説くへし。

第一種、桑港を起點とし布哇を経て横濱に到るもの、即ち幾と太平洋を横斷し米、日兩國間に於ける直線的海底電線と稱すへし。

第二種、桑港より布哇に到り、西進して米領「グワーム」を経て弗律賓に達し、北折して香港に達するもの。

同線は米西戰役の結果として米國が弗律賓諸島を收容せし後、紐育の「私

立會社か一千萬弗の資本を以て之を完成せむと企て今現に合衆國政府に交渉中也。

第三種、加奈陀政府の設計に係るものにして、晚香坡を起點として南西に向て太平洋を横きり、布哇の附近にして英國貯炭所なる小島フニングに連り、南進して新西蘭島に到り、更に濠州に趨き、北折して香港に出づるものなり。

第四種、晚香坡より西北の洋底を駛せ、米領亞立西安諾島の海岸を繞ひ占守の北端に來り、千島諸島に沿ひ根室を経て日本に接續するもの也。

予か本年米國に在るや、合衆國人及び加奈陀人と偕に地圖を披きて、其の敷設すべき進路を按し、研鑽する所あり。予等は其の結果、前記四種の中、終の第四種を以て尤も大成し易く、復た尤も有利のものとして認定せり。請ふ其の理由を約述せむ。

夫れ太平洋海底電線敷設の計畫か既に芽萌を數十年前に發し、外交及び經濟諸般の急要に迫られ、荏苒曠日、今尙は遂行せらるるに至る能はざる所以の事由

は資本の闕如にあらず、關係諸邦等の妨礙にあらずして、自然界の障礙に主因即ち是也。陷落窟は太平洋洋底に連亘し、其の幅數百海哩に及び、東西に短く、南方に長く、水深三千尋乃至五千尋に出入す。開く該陷落窟は始め米國測量艦「タスカロ」を號するもの、洋底測量に従事し、發見せしより、艦名を以て之に命するに至れりと。前記第一種の線は日米間に於ける最近の距離なれども如何せん、タスカロ「」を經由せざるへからず、故に其の工事極て困難なるのみならず、其の經費も亦隨て鉅額を要す。第二、第三種の線の如きは迂回の線路なれば、其距離も遠く又經費も嵩むは必然の數也。加之第一、第二、第三種の線ども何れも咸な三千尋乃至五千尋の海底を經由せざるを得ざるの困難あり、然るに第四種に至ては、幸に之を避け、専ら大陸の近傍及び島嶼を利用し、恒に太平洋の北部を横駛するか故に、海底淺く、敷設及び修理工事に便捷なるへし。是れ予か第四種を利とする所以の第一也。第二及第三線は太平洋の中央部を横過し、孰れも赤道を去る遠か

らざるを以て、其の哩程極て遼遠也。然るに第四線は緯度北方に偏するか故に、佗の三種に比すれば其の哩程却て短少也。是れ予か第四種を利とする所以の第二也。第一、第二及第三種は幾むと其の計畫者となるべき一國の領土のみを經由するも、第四種に至ては英領加奈陀、北米合衆國及び日本を經由するを以て、此三國の共同事業とし、資本に於ても、人力に於ても、交互に分擔することを得へし。是れ予か特に第四種を利とする所以の第三也。唯予か竊かに疑を懐けるは白令海峡より浮流し來る氷塊か或は此電線に多少の障害を加ふるることなきや否に在り。是等は技術専攻の士の査察を俟つ所也。然れども縱令多少の障害を蒙ると假定するども、前述三個の利益に對比せば、收支償ひ得て餘あるへし、況んや若し障害なきに於てをや。

苟も第四種を以て至良の線路とせば、我日本政府及び國民は須らく適當の時機に於て至適の方法を乗り之か大成を圖らざるへからず。予の觀る所を以てすれ

ば、假りに其の敷設經費を以て一千萬弗即ち貳千萬圓とし、敷設事業を英、米及日本三國の共同事業とせば、日本の支出額は其の總額の三分の一、即ち六百六十餘萬圓となるへし。而して官業若くは民業の孰れにするも可なれども、日本政府は該事業保續の爲め、保護法を採るを至當とす。故に政府にして該事業の資本に對する補給利子を五朱とせば、假りに電信料の收入を最低額二朱とするも補給の利子は三朱にして毎年僅々二萬圓弱にて足るへし。是れ眞に至寡の消費を以て至大の利益を收むるの道にあらすや。

近くは「サー、サンドフォールド、フレミング」が英國植民大臣「チェームパレーン」氏に獻策せし太平洋海底電線敷設は暹香玻より「フニング」島を經、新西蘭島を過ぎて濠洲に達し、更に印度洋に出て、錫蘭、新嘉坡及び香港を通貫し、更に南下して南阿の岬<sup>ケイプタウン</sup>に聯り、復た南亞非利加大陸の南西海沖を過ぎて英國に到達するものにして、全長貳萬參千海哩に及び、其の工事總額五千萬磅乃至六千萬磅即ち我五億



萬圓乃至六億萬圓と豫定せり。本年四月二十七日刊行英京「タイムス」は報すらく英國政府は太平洋海底電線委員會の保薦になれる建案を是認し、加拿陀及び濠洲殖民地と共同して事に従ふことを准許せりと。「タイムス」は特に其の社説に於て太平洋海底電線の必要なる以所を論明し五千萬磅の鉅貨は以て戰艦五隻若くは快砲なる巡洋艦一打(十二隻)を建造するを得へし。然りと雖も單に海戰戰畧の點より視るも、數多の戰闘力強大なる艦艇を増建するは寧ろ迅速なる交通線即ち海底電線を敷設するの優れるに如かず。蓋し時間を制するは戰捷を占むる主因なれば也。更に通商貿易外交等の點より視るも、太平洋海底電線敷設の要務なるは彰彰乎として昭也と辯破せり。我帝國朝野の識者三思して可也。

昨秋橫濱商業會議所會頭大谷嘉兵衛氏費府に於て開かるへき萬國商業大會參列の爲め渡米せらるるに方り、余を訪ひ、氏か太平洋海底電線敷設の建議を該大會に提出せむと欲するの意を語り、余の所見を叩かる、余は明治二十二年ブレ

ン氏と會論せし以降、之か研究に励み、其の結果第四種の利なることを答へたり。惟ふに英國政府は前述の准許を爲せし以來、其の事業完成に對する諸般の設備の並理中なるへし。故に早晚其の工事に着手せらるるの日あるへし。我日本政府及び國民は須らく其の著手せられざるの前に方りて、英、米、日三國共同の海底電線敷設を經營すへし。縱令加拿陀政廳若くは華盛頓政府が各自獨有の海底電線を敷設するも可也。多は寡に優る遠し。大西洋の如きは、四重電線一組三重電線二組あるにあらずや。況んや予か唱道する第四種電線の如きは、太平洋中、至短至廉至便のものなるに於てをや。

夫れ極東の商工業國たる日本帝國をして歐米の諸大市場と近邇せしめ、最新至近の經濟的變象を知悉せしむるの道は、太平洋海底電線を措て亦何かある。現時並に將來の世界萬邦は異跡同心の有機體なるを以て、其の一隅に發生する國際問題は雷電の如く疾く總躰の經濟的狀態に影響を波及す。太平洋海底電線は日

本をして其の變勢を自覺せしむる唯一の機關にあらずや。將來滋、旺盛隆昌なら  
 ひとする歐、米、亞三大陸の通商貿易をして、東、西兩半球の人種的、國際的問題をし  
 て渾て、太平洋海底電線に由り、復た悉く日本を経て、交互に相通牒せしむるは、世界  
 の公益にして、復た日本の光譽にあらずや。

今や之を内にしては、我日本帝國は歐米列國と對等の條約を締結し、内地雜居を  
 許容し、先進諸邦と同一の軌道を趨せ、同一の進展を圖るに到れり、故に帝國人民  
 たる者は通商貿易に、外交に、軍事に於て、列強と雁行し、馳騁するに足る機調、特に  
 時間を制するの海底電線を具有せざるへからず。若し其の敷設に關し、共同分擔  
 するの邦國なしとするも、尙ほ獨力之を大成せざるへからず。然るに幸にして北  
 米合衆國に於ても、加奈陀に於ても、多年其の計畫有り、帝國國民は宜しく是等希  
 望を一にし、必要を借にし、海洋を同ふせる二國と相提撕し、宇內的鴻業たる太平  
 洋海底電線敷設を完成すへし、苟も斯の鴻業完成に對し、共同の運動を爲さむ歟。

同情親和の情、油然而して、彼我の間に空湧すへし。同情親和の念生するは、實に  
 り三國國民の慶事なるのみならず、眞に宇内治平の泉源也。

## 第六 加拿陀新設鐵道及「フアシヨダ」問題

大凡人類活動の區域及び其の交通の衝路は、世々變遷するもの也。古代文化の淵藪たりし地中海は、晚近まで一時東邦及び西歐間の商業的聯絡を結ぶ唯一の航路にして、文化、經濟、外交貿易並に軍事の中樞地たり。大西洋及び北海に於ける沿岸の諸國新に起り、喜望峯經由の航路及び新世界時を同ふして發見せらるゝに及び、人類活動の區域並に其の交通の衝路は西漸して大西洋に徙れり。今や第十世紀の末期に方り、人類活動の區域及び其の交通の衝路は再變して太平洋に遷らむとす。夫れ人類活動の區域となるの地は政權並に商權の爭奪を來らし、其の交通の衝路となるの地は萬邦船舶の離合聚散する所、宇内富利の雲集する所也。苟も太平洋に於ける政權及び商權を把握し、宇内の富利を占據せむと欲せば、須らく人類活動の區域に對し緊要なる水陸交通運輸の機關を具有せざるへか

らす。而して萬邦中露、英、米三國は實に斯の機關を具有し、若くは將さに具有せむとすもの也。露國は刻下工事中の西伯利鐵道に由り、英國は既有の蘇士運河及ひ加奈陀太平洋鐵道に由り、米國は計畫中の尼加拉加運河に由り、太平洋及び其の沿岸大陸に於ける水陸交通運輸の大權を分割せむと欲するもの、如し。既己に水陸交通運輸の大權を分割する者は復た太平洋の外交貿易軍事特に海軍の覇權をも分割するの勢力あるもの也。方今露、英、米三國か業に己に第二十世紀本平洋總局の問題に對する有力なる發言者彌大なる經營者を以て目せらるは、豈に偶然ならむ乎。

「太平洋、其の海岸諸島及び渺茫たる滄波萬里の海洋は今後宇内大事件の演せらるべき主要の舞臺となるへし」とは、千八百五十二年即ち今を去る四十有八年前、北米合衆國元老院に於て議員、ウヰルリヤム、ニッチ、シーワードカ辯破せし所の豫言也。而して其の豫言今將さに事實となりて照應せむとす。拿波翁謂はすや「戦争の

主因は商權の爭奪に在り」と。太平洋の如き政權及び商權爭奪の舞臺に於ては商戰、政争及び太甚しきに至ては兵戰を觀るに到るべきは、蓋し必然の數なるへし。而して極東、大は世界に利害得喪を感ずる列強は、之に對應する政策を定め、之か施設を圖らざるは莫し。請ふ英國より之を説かむ。

英國か現時尤も憂慮する所は、資本の缺乏にあらず。一、七五〇、〇〇〇、〇〇〇磅の海上貿易を有せる英國にして、復た何の足らざる所あらむ乎。若くは艦隊の孤弱にもあらず、艦艇總數四百六十二隻を有する英國にして、復た何の懼るゝ所あらむ乎。然らば即ち憂慮する所なきか。然らず。英國政府か深憂大患とせる所は、糧食即ち穀物及肉類の増殖及び其の供給法の整否如何に在りて存す。英國政府は之か爲に南亞弗利加及び加奈陀に於て二大經營に著手せり。詳言せば、第一改羅カイロより亞弗利加大陸の南端なる「ケープ、タウン」に到る該大陸縱貫鐵道を敷設すると、第二、波土孫ボート、ネルソンの西岸に於ける「ボート、ネルソン」を起點とし、太平洋の沿岸なる「ボ

ト、シムソン」を終點とする加奈陀横斷鐵道を敷設すると、即ち是れなり。亞非利加に於ける「フッシュョダ」問題は是れ英佛兩國の葛藤を醸起し、竟に兩國の外交政策を基本より震盪搖動せしめたる重大の事件なることは普ねく時人の稔知する所也。然りと雖も此問題は何等の原因に依り、撞突をして斯くの如く激甚ならしめたるか、惟ふに其の眞因を探知せるの士は、蓋し罕なるへし。予も亦時人と俱に「フッシュョダ」問題に關して疑を懐く者なりしか。昨年五月米國に渡航し、英領加奈陀及北米合衆國を巡遊するの際、各種の人士に會見し、其の談論を聴き、又た實たすに歐米列國の外交を以てしたる結果として、初て英國か前記二大經營企圖の雄志あるとを知悉し、特に「フッシュョダ」問題か其の經營の一なる亞非利加大陸縦貫鐵道と經濟上及軍事上、至重至深の關繫を有しをる所以の事由を悟り、英國か該問題に對し佛國に向ひ極て強硬なる外交手段を乘る所以の事由を明にすることを得たり。

加奈陀政府は波士孫灣の西岸に於ける「ポート、ネルソン」を起點として、鐵道を敷設し、西南に向て「プリンスアルバート」に接続し、更に方位を西北に轉し、落機山麓を通過して太平洋の沿岸に到達し、「ポート、シムソン」を終點とするの計畫を起せり。而して此幹線より四方に支線を敷設し、以て或は畜産豐沃の土壤を開墾し、稼穡の道を拓き、或は曠原草澤を利用して牧畜事業を振興し、或は石炭、銀、鐵、銅等の礦物を採掘し、以て無限の遺利を収め、或は茂林巨材を伐採し、以て材木又は製紙の原料を製出し、大に將來に於ける殖産興業の道を開かむと欲せり。此の新設の鐵道線路に據れば、「ポート、ネルソン」及び「ポート、シムソン」間の哩程は千七百哩にして、僅に二日を以て亞米利加大陸を通過するを得へし。而して既設鐵道線路即ち晚香坡「モンツワール」間の線路は之を横斷するに、四日と五時間と要するを以て、前者は後者の行程に比すれば、實に二日を短縮せり。且つや「ポート、ネルソン」及び英國「リバプール」間の航海里程に於ても、之を「リバプール」及び紐育間の航

路に比較するときは、實に二百五十海哩を短縮せり。而して「ポート・シムソン」及び横濱間の航路に於ても、之を現時の晚香坡横濱間の航路に比較するときは、實に七百海哩を短縮せりと謂ふ。惟ふに此の新設の鐵道開通の曉に至らば、英國と日本との交通は、海上に於て九百五十海哩、又た陸上に於て二日の行程を短縮するに至るべし。

抑も此の鐵道計畫の原因は、(一)英國と亞細亞に於ける英領との交通を敏捷にするの目的に出で、(二)加奈陀の富源を利用して、穀物及び肉類の供給地を其の領土内に開拓し、以て英國人民の生活上一日も缺くべからざる食物の根據地を確實ならしめむとするに在り、是等の目的は其の本位的のものにして最も彰明較著なるもの也。其の副位的の目的に至ては、(甲)英國より亞非利加大陸の各部、加奈陀及び濠洲に軍隊を派遣するに悉く自國領土内の鐵道線路並に自國艦隊の保護の下にある航路を迅速安全に通過すると、(乙)英國より各植民地に、復た各植民地

より英國に軍需品を交互に遞送すると、(丙)英國と各植民地間の通商上、内政上及び諸種の共同事業の隆昌進暢を圖ると等を包括す。是等の本位的及び副位的目的は此の鐵道敷設を促かしたる積極的原因と謂て可也。更に消極的原因と稱すべきもの有りて存す。積極的原因は將來に於ける英國富強振興の政策を胚胎するも消極的原因に至ては現時に於ける英國富強保維の政策を意義するものなり。故に施爲すべき急務は前者よりも寧ろ後者に在り。然らば則ち消極的原因とは果して如何なるものぞ。曰く佗なし。現時英國人民の食物及び其の供給法の不<sub>レ</sub>安全、不確實なるを基本より匡濟せむとする。即ち是也。現時英國は海上權力に於ては字内未曾有の優位を獨擅し、所謂制度、物質並に人員に於て寰宇第一位を占め列強敢て其の右に出づるものなきに拘らず、又た其の資本は盈滿積蓄して、商工業の發達、其の最高度に達するにも拘らず、英國人民の食料は第一、北米合衆國の穀物及肉類に依頼し、次て印度及び濠洲に依頼するの狀態也。危虞之より太甚

しきは莫し何となれば一朝事有らむ歟、縱令如何なる強勢の艦隊を諸海嶺に泛ぶるにもせよ、未だ其の食料供給の交通線を遮断せらるるなきを保せず、若し此の禍殃に遭逢せば、英國人民は忽ち飢饉に瀕するに至らむ、豈に危からず耶、而して斯の危虞を脱却するの道は唯食料供給を自國領土内を通過する鐵道に仰くの一法ある而已、是れ英國政府が第二十世紀の將來を遠觀し、世界に於ける自國の權力を永續し、増幅し、強大ならしめむか爲め、第一著に總ての勢力の原動力たる食料の増殖及び其の供給の道を確立する所以の急務なるとを認め、其の手段として鐵道敷設を企圖する所以也。

加拿陀政府は該鐵道が軍事上及び經濟上、至大至重の關係あるか故に、一日も速に其の完成を親むと欲するも、如何せん、植民地たる加拿陀の經濟仍ほ發達せざるか爲め、其の資本の供給窘困なるを以て、此新鐵道會社は先づ十年計畫を立て、一個年間に二百哩乃至三百哩の敷設を目的とし、此鐵道の幹線及び支線敷設を

竣成することに決定せりと謂ふ、而して此鐵道敷設に要する資本は、該鐵道會社に於て社債を發行し、加拿陀、北米合衆國又は英國等の資本を吸収し、之に充つる見込なりと云ふ、又た其の社債に付ては加拿陀中央政府及び各州の政廳は元利金に對し辨償の保證を爲し、以て中外の資本家を安堵せしむることに決定せりと云ふ。

亞非利加大陸縱貫鐵道の線路は埃及改羅<sup>カイロ</sup>を起點とし、該大陸の南端岬<sup>ケープタウン</sup>邑を終點とするものにして、大陸を南北に縱斷して、其の内地に於ける膏腴の土地を開き、穀物及び肉類の大供給地を創設せむとするの目的に出づ、此計畫にして完成せば、英國は亞非利加内地の穀物及び肉類を獨擅し、鐵道に由りて快速安全に之を埃及に輸送し、再ひ之を自國船舶に搭載し、地中海及び大西洋を経て本國に送致するとを得へし、是れ平時は勿論、戰時の際、英國國民の生計を維持するに於て、最も重要な政策なりとす、而して此航路哩程の如きも、從來の印度及び濠洲よ

り輸送するものに比較すれば頗る短縮するを得へし。之を要するに、加奈陀及び亞非利加大陸に於ける英國設計の二大鐵道にして完成するに至らば、積極的利益としては加奈陀及び亞非利加の内地にある沃野豐壤を開拓し、本國に對する無限の穀物及び肉類供給の途を開き、刻下北米合衆國より此等の食料品を輸入するものに比すれば、海上の航程も亦短縮せられ、且つ軍事上より謂へば、多數の軍隊を駿速安全に加奈陀及び亞非利加大陸の任意の方面に集中するを得へし。消極的利益としては、一旦緩急あるの日、英國人民が一日も闕如すべからざる食料品を外邦に仰ぐの危険を避くるとを得へし。是れ英國が將來に於ける宇内總局の大勢を洞觀し、南に於ては、亞非利加の食料品を專領し、西に於ては、英領加奈陀の穀物及び肉類に依るの利益を収むると偕に兩國の富源を開發して、大英國の貿易を隆昌旺盛ならしめむと欲するものゝ如し。加奈陀鐵道の敷設と亞非利加鐵道問題とは、英國經濟政策の大方針なるか故に

苟も其の進路を障礙するものあれば、全力全意を擧げて之を排斥掃蕩に勵むるものなり。是れ英國が「フアジヨダ」問題につき佛國に對し強硬手段を維持する所以なりとす。



## 第七 日本輸出生絲の現在及將來

帝國海外貿易品中、生絲實に其の第一位を占む。一昨年の如きは其の輸出總額貳千五百萬圓に上れり。惟ふに外國市場に於ける日本生絲將來の、一消一長は日本經濟の一盛一衰を致す主因なるべきを以て、日本生絲の海外市場に於ける現況、其の需要區域並に其の使途、外國製蠶絲即ち佛蘭西製、伊太利製及び支那製蠶絲と日本製蠶絲との優劣、使途の差違、特長如何、及び日本生絲の對世界方針如何、其の改良方針如何は、朝野の別なく、經世家と貿易家との別なく、養蠶家と製絲家との別なく、苟も殖産興業の實を擧げ、國家富盛の域に臻らむと務むるの士か宜しく專意精研すべきの國家問題也。

予は今を去る十有餘年前より日本生絲の海外市場に於ける聲價需要の増減、使途の區域及び性質、外國製絲との優劣、並に歐米に於ける日本生絲の將來に就き、

意を用ゐること周密也。明治二十七年一月農商務に次官たるの時職務上査察の急要なることを認め、内は専攻の技師、斯業家、養蠶家、製絲家、機業家に諮詢し、學說上より經驗上より其の見解を徴し、外は在外本邦各領事に日本生絲及び外國製絲に關し、調査を命じ、復た視察者を海外に特派し、實地に就き取調ふる所をあらしめ、以て中外より蒐集せる學理並に經驗上諸般の資料に由り、細心熟察せり、其の結果として予は、調査前有せざりし疑感の念を懐くに至れり、語を切にして謂へば、予は日本生絲の海外市場に於ける將來に就き不安の念を抱くに至れり、請ふ其の事由を約述せむ。

第一、生絲斯業者の見解に據れば、日本生絲は、歐米の市場、特に其の主要の需要地たる亞米利加市場及び同國絹織業工場に於ては、伊太利及び佛蘭西製蠶絲に及ばず、故に是等の工場にては、伊太利及び佛蘭西製蠶絲を縦絲とし、日本生絲を横絲とし、以て絹織物に應用す。

第二、日本生絲の原料たる蠶繭は種類一定せず、極めて多種に亘れり、故に之を以て繰絲するに細大不同の生絲となるへし、是れ機業家か縦絲とすることを好まずして横絲とする所以也、然るに我か斯業家は此の弊を匡濟するの道を講せず、寧ろ横絲のみを製せむとするの方針を秉れり。

第三、我國の蠶繭と外國の蠶繭は形狀同しからず、品質に於ても我固より彼に及ばず、我國の蠶繭は瓢形にして中央細小なり、伊太利、佛蘭西及び支那の蠶繭は橢圓形也、伊太利、佛蘭西及び支那の蠶繭は我國のものに比し、容積の割合より量目軽く、絲線纖細にして、護膜質薄弱なるを以て解舒し易く、亦概して強彈力多し、第四、假りに伊太利、佛蘭西及び支那の蠶種を輸入し、之を飼育するに、一兩年の後に至らば、其の蟲軀も、其の成繭も漸次豹變し、竟に原始の成形たりし橢圓狀一變して純然たる本邦蠶繭の特質たる瓢形にして「中クビレ」となるに至る、是れ從來經驗の證する所也、是を以て之を觀れば、本邦蠶繭の特質は蠶種の異同に基つ

くものにあらず、飼育の巧拙に由るにあらず、全く我國風土氣候、地勢風、大氣等の然らしむる所たることを知るへし。

第五。歐米特に米國の絹織物工場に於ては、日本生絲を縦絲とせず横絲としてのみ使用する。是れ蓋し日本生絲には「フアシ」多く、復たは「ケバダツ」こと太甚しさを以て斯くの如く第一等絲として使用せらるることなく、第二等絲としてのみ使用せらるゝ所以也。

予は研窮の結果として前記五項の弊害を認め、日本生絲か歐米機業界に於て伊米利、佛蘭西及び支那蠶絲と相顔頑すること能はず、劣等絲として擯斥せられ、纒は横絲として餘命を繋げることを思ひ、日本生絲の前途に關しては、痛歎憂虞の感、恒に胸裡に空湧するを禁すること能はざりし也。

日本生絲の積弊を匡擠するの道如何とは、暗歎憂虞の感と俱に予か腦裏に來往せし所思也。當時未だ社界に表言するに足る資料を得ず、復た矯正の方法を案

出せず。昨年五月、予は斯の患を懷き、積弊掃清の道を索むるの志を齎らし、米國巡遊の途に上れり。

若米後、日本生絲の大消費地たる「ニュージャージー州」パタムン市の機業工場に到り、親しく視察する所ありたり。聞く、曩に日本より視察の爲め、朝野各種の技術家及び斯業家等、パタムン市に赴き、工場觀覽を望みしも、當時米國斯業家等は日清戦後、日本貿易の勃興に留意し、特に日本内地各種の工業か俄然として、鐵茂隆起し、世界の經濟を攪亂し、悞るべき工業國とならむとするを看視し、入場を峻拒せり。故に我か視察員等は望を達せず、悄然として歸國せり。是れ予か當時親しく渠等より聽く所也。予は紐育駐在日本領事及び知友の紹介に由り、特に該工場觀覽を許容せられたり。是を以て一日、小村華盛頓駐紮日本公使、内田紐育駐在日本領事、有賀長文氏、其の佗友人と偕に「パタムン」市場に趨き、終日之か調査に従事せり。左に其の序次を記すへし。

第一 日本伊太利佛蘭西及び支那の蠶絲陳列館に到り、各國諸種の蠶絲を覽  
 其の絲質の精粗、絲線の織否、光澤の多寡、量目の輕重等を對比較量せり。  
 第二 前記四國製生絲を練る工場を觀覽せり。  
 第三 生絲染色工場を觀覽せり。  
 第四 生絲を織機に掛くる爲めの整絲工場を觀覽せり。  
 第五 織り上げ工場を觀覽せり。  
 第六 仕上げ工場を觀覽せり。  
 別語を以て之を訓へば、予は日本生絲が荷解さざるの始より、竟に織り上げら  
 れ市場に販賣せらるゝに到る場まで、之を歴觀せり。未製品として機業者の手に  
 墜ち、人工、化學、機械の作用を経、既製品と化して、消費者の手に渡る際まで、之を通  
 覽せり。且つや其の視察の間は、勿論、滯米中、日本生絲に關しては、斯業者、技術家、生  
 絲商賈に就き、其の意見を叩き、學說上及び實地上の資料を蒐収し、幾多の事實を

對比商量し、或は之を彙別し、或は之を綜合し、以て一定の原理に歸納し、復た幾多  
 の假想を描き、之を事實に對照して、其の眞偽を判定し、其の適否を查駁せり。是等  
 の精嚴なる講究を経て、予が發見したる結果は、蓋し左の如し。

第一 日本生絲と伊太利佛蘭西及び支那蠶絲とは明かに其の用途區域を離  
 隔せり。

事由 從來予の聞きし所に據れば、日本生絲は伊太利蠶絲と同一の用途に適  
 用せらるゝと、今親しく目撃する所は、之と異り、伊佛の蠶絲は黒紫、赤紺等の濃  
 厚なる色彩に著染し、其の色彩の絹織物に織り出すに適し、日本生絲は白、桃  
 色、薄淺黃等の淡明なる色彩に著染し、其の色彩の絹織物に織り出すに適す。  
 斯くの如く、日本生絲は濃厚なる染色に於ては、伊佛蠶絲に一籌を輸すと雖  
 も、淡明なる染色に至ては、復に兩國製のものに秀て、世界獨歩の逸品たるを  
 失はず。此の點に於ては、將來何等の競争者ある處、雖も、天下の需要者か清楚

にして淡明なる薄色絹布を鍾愛する間は、本邦蠶絲の需要は永續すべき也。支那の蠶絲は伊佛兩國の蠶絲と用途の區域を同ふせるも、品質に於ては之れに劣ること數等也。故に支那蠶絲は伊佛兩國の蠶絲の敵手にあらず、復た支那蠶絲は我國蠶絲と用途區域を異にせるを以て、我斯業界の競争者として決して畏るべき勁敵にあらずるなり。

第二 品質の點に於て日本生絲は伊佛蠶絲に劣るも、練減りの點に於ては、日本生絲は伊佛蠶絲に優れり。

日本生絲は拾二デニールより拾七デニールに出入し、品質に於て一より七までの範圍に在り、細太の不同太甚しく、品種極めて不揃也。之に反して伊國蠶絲は拾參デニールより拾五デニールの間を上下し、品種幾むと歸一せり。故にデニールの差異寡く、細太の不同鮮少く、強彈力復た之に準ずるものを以て、純良精美の生絲なりとせば、日本生絲は此標準に遠かり、伊國蠶絲は寧ろ

此標準に近しと謂ふへし。

練減りの點に到て、伊國蠶絲は化學的作用に由り、練減二割五分、日本生絲は一割七分乃至一割八分に到る。斯の如く練減の點に於ては、日本生絲は伊國蠶絲に比し練減寡きこと七八分也。詳言せば、日本生絲は伊國蠶絲に比し、百斤につき七、八斤の利あり、百斤につき七、八斤の利は消費高鉅大なる機業工場にとりては洵に偉大なる利益となるもの也。米國、バタスン市の機業家か、日本生絲か品質に於て伊國蠶絲に劣るも、練減に於て彼れに優るを以て機業上飲くへからざる蠶絲として使用する所以茲に存すと謂ふへし。

第一及び第二の事實を發見するに及び、予か積年の疑惑は、春雪の若く一朝にして融解せり。予は多年日本生絲は伊國蠶絲と用途の區域を同しくせりと思惟せり。是を以て我生絲業の如きは若し伊國蠶絲業の優力なる競争に遭ふか如きことあらむには學理の應用、機械の進歩、資本の盈豐、養蠶及び製絲業の發達、通商機

關の整備等の諸點に於て、我未だ彼れに如かざるを以て、其の結果、我が敗となり、彼れの勝となり、伊國蠶絲の爲め、歐米に於ける我生絲を蹂躪せらるゝに至るへしとの憂を抱きをりしなり、我國斯業者間予と憂を同ふせし人、蓋し鮮少なからざりしなるへし、然るに足親しく米國機業地を踏み、目親しく其の機業工場を觀るに及び、前きの豫想は全く事實と異り、品質に於ては、我、彼れに及はざるも、練減に於ては、我、優に彼に秀てたる處あり、即ち經濟上日本生絲は世界獨歩の利益を專占することを識れり。

練減に於て我生絲か伊國始め佛蘭西及支那蠶絲に勝れる所以の事由は果して那邊に伏する乎、人為歟、自然歟、將た又た人為自然併發に由る歟、予は其の事由の存する所を窮極せんと欲し、再攻の技術家機業家、理化學者、動植物學者に諮詢し、復た渠等の質疑に對し、語るに我日本の地勢、地形、地質、風土及び氣候等を以てし、查覈を借にし、研鑽を累ねし後、日本生絲か日本特有の性質を有する所以の事由

は、一に日本固有の自然力即ち黒潮（シヤンカレント）に基つくものなることを識れり、夫れ黒潮なるものは印度洋に起り、日本帝國の太平洋岸及び日本海を駛流し、以て帝國の腹背を包み、北海道近海に於て二流相會し、東に越きて米國海岸を掠め、環りて再び太平洋に入り、其の蹤跡を失ふもの也、黒潮は多量の濕氣を帶ぶるものなるか故に、帝國の表裏を抱き北走するの際、其の濕氣の大半を我内地に遺留し、動植物及び地質に對し、一種特殊の變化を及ぼし、以て動植物等に特有の性質を賦與す、之に反して伊太利及び佛蘭西の如き地勢大陸國にして、島國たる日本帝國と大に趣を異にし、東に亞拉比亞の沙漠を控へ、南に亞非利加（サハラ）の大沙漠を有するを以て、乾燥の風遂然として東南より發り、飄乎として全國を過ぎ、終歲絶ゆる時なし、是を以て日本内地は伊佛内地に比し、濕氣極て多量也、而して濕氣の多寡は直に桑葉に於ける要素及び蟲跡の組織に對し、著るしき差異を生ず、現に伊佛兩國の蠶種を輸入し、之を飼育するに、桑葉及び氣候風土の差に緣り、

蟲跡の組織本國のものとなり、之より生ずる産繭亦全く本國のものとなり、楕圓形のもの漸く變じて、遂には日本繭の特質たる瓢形中「クビレ」と化し去るに到る。其の他諸種の動物の如き、復た各種の植物の如き、斯の結果と同一轍に出てくるは莫し。動物の如きは輸入後兩三年を経れば、其の毛色等漸次日本産のものに相近似するを視る。多年の後には竟に總ての點に於て著るしき變化を來らすに到るや必せり。植物の如き或る種のもは輸入移植後一兩年にして其の原始特有の馥郁たる芳香去り、艶美なる色彩減し、遂に純然たる日本産と毫も異なる所なきに到る。是れ動植物家の實驗する所の事實也。是を以て之を觀れば、我日本の自然力即ち黒潮か、動植物發育に偉大の勢力を及ぼすことを知るべし。蠶繭の如きも亦斯の勢力の感化を享くべきは争ふべからざる真理也。然らば則ち伊佛兩國の蠶絲は乾燥の空氣の影響を蒙り、日本生絲は濕温の空氣等の影響を蒙り、各特殊の性質を享受せり。是れ眞に人力、人工の克くする所にあらずして一に自然、天與

の賜也。故に我國の蠶業者は何等の努力を以てするとも所詮伊佛兩國蠶絲と同種同位のもを製出すること能はざるか如く、伊佛兩國斯業者も亦我日本生絲と同種同位のもを産出すること能はざるなり。予の推論にして果して眞なりとせば、日本生絲は、他模倣し能はざる、企及し能はざる、競争し能はざる、字内無雙の特質を具有し、伊太利、佛蘭西、及び支那蠶絲の侵襲すること能はざる特定の需要區域を終古永遠に保有することを得べしと斷言すべし。日本生絲の特色にして果して我邦固有の黒潮の結果なりとせば、是れ洵に優力強大なる國利にして、此の特色を滋と發揚せしめ、其の美質を益と醇厚ならしめ、なほ我邦主要の貿易品として、汎く歐米市場に聲譽を擡にするのみならず、其の輸出額も彌々増進すべし而已。唯現今日本生絲の缺點とする所は、絲線の細太不同にして「デニール」の差等比較的に太甚しきの一事に在り。然りと雖も此缺點たるや、素と製絲家の不注意に職由するか故に、復た人爲を以て之を除去すること

を得へし。左に予か抱持せる生絲改良策を擧げむ。

第一 蠶種を簡選し、又昔「小石丸」角又及び「青熟」等約十種を採用し、日本九州の南陔より北海道の北隅までを數區に分劃し、各區の風土、氣候、地質等に應じ蠶種中最も適するものを撰定し、之を飼育せしむるの方針を乘るへし。

第二 製絲家をして組合を組織せしめ、各組合をして互に氣脈を通し、以て製絲の方針、目的、方法等を畫一にせしめ、又た監督を嚴正ならしめ、以て「デニール」の不同を防ぎ、工場衛生、工女獎勵法等諸般の必須なる規定を設け、努に製絲業の組織的發達を圖るべし。

第三 工女の繰絲技術の上進を獎勵し、繰絲の際、接緒する繭の粒數を恒に齊一ならしむることを勵め、以て繰絲細太の不同を防ぎ、從來日本生絲の缺點たる「デニール」の差等太甚しきを嚴に矯正すへし。

次に生絲と關聯せる機業に就き、予の所見を披陳する處あるへし。前述の如く蠶

業を獎勵し盛に生絲を産出するに至らば、供給と需要との權衡適度を失し、供給過多となり、絹物の價格暴落を致すことなきを保せずとの杞憂を懷く人士あらむ。予を以て之を觀れば、是れ所謂取越苦勞に過ぎざる而已。今若し生絲の生産國又は海外の機場の狀況を查察せば、絹織業なるものは現時既に已に偉大の進歩を爲せるに拘らず、將來滋々隆盛の域に進むべきの勢あり。隨て之か材料たる生絲の需要も愈々増進すべきは、必然の結果なり。

夫れ太古人類は赤裸々なりしか、樹葉を束ね纒に霜雪を凌けり。其の後獸皮を剥き之を纏ひしか、星移り物換り、人文漸く開け工業緒に就くや、木綿を産出して織物を製し、或は鳥羽獸毛を採蒐して織物を調製し、而して絹織物を製出せしは實に中古の事に屬す。殊に絹織物の如きは其の始め亞細亞に於て製出し、歐洲に輸致せしものにして、歐洲に於て自から之を製出するに至りしは蓋し輓近の事に外ならず。之を以て往時亞細亞製の絹織物一たひ彼の地に入るや、争て之を購



求し、王公の衣冠として之を愛重し、其の寸尺をも重寶視せりと謂ふ。又た前述の如く、絹織業は歐洲輓近の事に屬するを以て、夫の金巾若くは毛織物の發達に比すれば殆ど零壞の差あり、而して歐洲に於ける絹織物の需要は靡然として其の上下を席捲せむとするの勢有り。近時交通運輸の便開け、黃白を投せは直に優麗なる絹織物を購求し得るを以て、歐米の貴婦淑女は羅紗のゴハ々々するものを棄て、金巾のバサ々々するものを脱して絹布の婉麗軟美なるものを選択に至れり。而して今日歐米に於ては、金巾の最上品と絹の最下品と同一の價格也。今を去る十年前までは、歐洲の婦人社會に於ては絹織物の需要極て寡少にして、多くは金巾製のものを下衣とし、絹織物の如きものは唯上衣として使用するに止りしか。現時は則ち之に反し、上下表裏悉く絹織物を常用とするに至り、下婢の如き者に至るまで尙ほ之を用ひ、男子着用の衣服の如き甲斐絹を以て其の裏地とせり。其の佗上等の菓子箱の如き、金銀細工を入るゝ箱の如き、絹を以て其の内部を裝

飾被覆し太甚しきに至ては、煙草の如きも絹製リボン<sup>リボン</sup>を以て之を包み、花屋の如きも花の枝軸を絹布を以て縛束し、以て顧客に賣與し、其の絹布を使用すること恰も我國商賈が賣品を縛束するに麻を以てすると同一也。

佛國に於て千八百八十三年中に使用せし絹布總價額は一千二百萬弗なりしか、千八百九十五年即ち十二年後には二千四百萬弗即ち其の二倍に及へり。又た同國に於ける絹の產出高は、千八百八十三年には三千四百萬弗なりしか、千八百九十五年には一億三千萬弗に達し、十二年前に比し一億弗弱の増額となれり。佛國一國に於ける増額を観るも尙ほ斯くの如し。而して供給に對し需要の増加率は多大の趨勢也。而して絹織物の原料たる蠶絲を製出するは世界中僅に伊、佛、日、清の四箇國に過ぎざるを以て、本邦蠶絲業の如きは將來極て有望なりと謂はざるを得ず。曷ろ產出過多を是れ憂へむ耶。

夫れ養蠶は農業經濟の一部なるを以て、經濟界の景氣若くは不景氣に伴ひ、需要

に一昂一低を來すへきは自然の數也。故に景氣好良なれば供給夥多なるとも決して需要壅塞するか如きこと莫かるへし。北米合衆國の如きは本年大統領の改選行はるへきを以て政治運動旺盛の爲め一時經濟界の不景氣を醸生することあらむ。然れども是れ唯須臾の變態に過ぎず。復た世間の習俗華侈に趨くに隨ひ絹物の需要も亦正比例に増進するもの也。故に俗間に「砂糖の需要増加するは世の文明に越くの表徴也。絹の需要昂進するは世の景氣殷盛の表徴也」と稱するは蓋し眞理也。而して之を世界に於ける最近の生糸産出及消費の統計に照らすに、絹の需要増進するに對し其の産出額は割合に昂進せず。試に左の統計を覽よ。

年次	産出額	消費高
明治廿八年	一四、九五〇、〇〇〇	一五、一三〇、〇〇〇
同廿九年	一四、四九〇、〇〇〇	一四、一二〇、〇〇〇
同三十年	一四、七六〇、〇〇〇	一六、二三〇、〇〇〇

是を以て之を觀れば明治二十八年には消費高産出高に超過し、二十九年には其の反對を示せり。三十年には消費高復た産出高に超過せり。斯くの如く消費高及び産出高は一高一低、波動的の消長を顯示せり。而して生糸の價格低廉なるの際は堆積して動かすも雖も價格騰貴すれば俄然として動くもの也。其の動くや必ず景氣良好なるの際に於てす。我國に於て日清戰役後、一時絹物の需要急進せしは其の一例也。

之を要するに將來世界に於ける絹の需要は漸次昂進するの趨勢有り。而して絹の産出地一定の地區に制限せられ、特に薄物淡色物に至ては、我日本の産出品は世界獨歩の良質を專有せるを以て、今後愈々其の特質を發揮せば、世界市場に於て獨擅の貿易品となり、永く日本第一位の貿易品たるの資格と名聲とを保有し、小は生絲業者貨殖の道となり、大は帝國富強の基を鞏ふし、國利民福兩つなから全ふするに足るへし。

## 第八 日本輸出茶の現在及將來

宇内萬邦中製茶國と稱すべきものは唯支那、印度及び我日本の三國ある耳。斯の三國より外國貿易品として輸出する製茶は眞に全世界を其の市場として供給せられ、宇内の兆民は此の三國の供給に由り紅綠兩種の製茶を覓め獲て、始めて喫茶の嗜好を滿たすものなり。三國か外國貿易上製茶業の盛衰及び其の輸出の消長を重要視する所以、洵に茲に在り。

紅綠兩種中、日本は純然たる綠茶國にして、其の輸出地の重なる者は北米合衆國並に英領加奈陀とす。而して此二國の市場に於て日本綠茶の勁敵となり、猛烈なる競争を試むるもの二個有り。何ろや、曰く支那及び印度、製の紅茶、曰く南米及其他の諸國産の珈琲即ち是也。就中珈琲の如きは一方に於て合衆國の資本家か南米及其他の諸國に於て之を栽培し、之を精製し、之を輸致販賣するものなるを以

て、利害得喪の感、日本緑茶に對するの比に非らず、往々諸種の方畧を講して我緑茶の聲價を傷け、之を米國市場より驅逐せむと圖り、復た佗方に於て、我日本緑茶は之を南米及其他の諸國産たる珈琲と對照し、其の價格今日の程度以下に引き下くること能はず。珈琲の比較的廉價の爲め、我緑茶の需要區域は日に滋養せらるるの窮境に在り。是等二個の勁敵あるか爲め、日本緑茶の輸出額は、既往五年間平均僅に五六百萬圓を上下するに止り、生絲輸出の如き異常の増加あるを視ざるなり。而して日本緑茶は常に獨り支那及び印度の紅茶並に南米及其他の諸國の珈琲の如き自然の競争者を有するのみならず、復た合衆國より人爲的妨礙を蒙れり。人爲的妨礙とは佗なし、合衆國政府は一昨年米西戰役に際し、軍事費補充のため關稅増徴の急要を感じ、即ち日本輸出緑茶に對し、毎听米貨拾仙の關稅を賦課せり。是れ我日本輸出緑茶貿易に對する一大打撃に非らずして何る。苟も斯業者たる者は固より、朝野の經濟家にして之れか善後策を講し、商運恢復の施

設を試むるに非らずむは、我緑茶は支那印度の紅茶及び南米及其他の諸國産の珈琲の爲に蹂躪せられ、合衆國並に英領加拿陀の市場より永遠に驅逐せらるるに到らむ。是れ予か昨夏米國に遊ひ、親しく目睹したる所にして、我日本緑茶外國貿易の外患として憂慮の念を深からしめたる所のもの也。

既已に斯の外患あり。然るに復た内憂醸生し、以て日本緑茶の海外貿易を萎靡振はさる。の苦地に陥擠せむとするもの有り。内憂とは佗なし、我緑茶當業者間には玉露製の無色茶を米國に輸出し、日本人の喫茶法と同しく砂糖若くは牛乳を混淆することなくして飲用せしむへしとの見解を懷抱する人士あること是なり。予之を以て策の宜しきを得たるものとすること能はず。寧ろ緑茶貿易の前途を以て滋と窘厄の境に臻たらしむるの拙策也と思惟せざるを得ず。予は緑茶の友なるか故に、直に肚裏を披瀝して、斯業家の三思を求めむと欲す。

夫れ一國の慣習なるものは數百年間に漸成し來れるものにして、内部より威武

若くは教化を以てするも、決して一朝一夕にして克く之を革變し得るものにあらず。況んや外部より之を更易せむとするものをや。其の勞して効なきは史乘の既己に證する所也。飲食居住の方法の如きは邦民慣習中最も動かし難きものたるは世人の知悉する所のものに非ずや。然るに我茶業家は米國人をして數百年の慣習を一變せしめ、日本産の無色茶に砂糖及び牛乳を混淆することを廢止せしめ、渠等をして日本人同様に之を飲用せしめむと圖れり。是れ恰も外國人が日本人に對して茶漬飯と澤庵を喫するは衛生の原則に背戾するか故に、斷然之を全廢せよと促致するど、同じく寧ろ勞して効莫かるへし。故に予は慣習上竝に貿易上、我茶業家が懷持せる意見の非なる所以の事由を列擧すへし。

第一 合衆國人は始に支那及び印度の紅茶を飲み、砂糖及び牛乳を混和し之を常用するの慣習を作り、次に日本綠茶を飲用するに到れり。是を以て日本製茶家が漫りに米國人に對し砂糖及び牛乳を混和することなく、日本の

國風に遵據して之を飲用せよと勸説するども、竟に無益の勞に歸すへし。是れ蓋し慣習は第二の天性なることを悟らざるに出づ。

第二 歐米流に依り砂糖及び牛乳を混淆して茶を飲むと又日本風に依り茶を飲む(即ち砂糖及び牛乳を混入せざるもの)とは其美味の點に於て前者は後者に比して復に甘美也。日本人は茶の風味淡きを愛するも、米國人は茶及其の混和物の美味濃きを嗜む。故に混和物廢止説は歐米人の嗜好を解せざるもの也。

第三 凡ろ貿易家なるものは、供給者の位置に在るものなれば本來需要者の嗜好を狂げ、太甚しきは其の慣習を革新せよと命令すべきものに非らず。是れ獨り海外の需要者に對して然か謂ふものに非らず、内國需要者に對しても亦然り。然らば則ち供給者たる本邦製茶家にして需要者たる米國人に對し、其の積年の慣習及び嗜好を變易して、日本の國風に準據し、無色茶に砂糖

及ひ牛乳を混入せずして飲用すへしと勸説するは、貿易の旨趣を解せざるものなり。

更に支那及び印度の紅茶と日本の緑茶との需要範圍の廣狹如何を較量するに、後者は固より前者の敵に非らざるを識るへし。歐米に於て日本緑茶は未だ單獨に販賣せらるるの域に達せず、恒に支那及び印度の紅茶と混同して販賣せらるるの情勢也。特に消費地に就きて之を驗するに、米國都市の旅館に於ける献立表中には、紅茶、臺灣茶及び印度茶と挿記しあるも、日本茶若くは緑茶の名を視ることは能はず。日本緑茶の爲め豈に浩歎せざるを得むや。

惟ふに將來合衆國及び英領加拿陀に於ける日本緑茶の聲譽を高ふし、其の消費區域を進暢し、其の輸出總額を増加するは、日本海外貿易家の急務にして、苟も此企圖を達せむとするには、第一、需要者の嗜好に適し、其の慣習に遵據して飲用せらるべき茶を製するの方針を採らざるからず。第二、日本緑茶の勁敵たる印度紅

茶を壓倒するの策を樹て、製茶法を改善し、茶質を精選し、新聞雜誌等の廣告、其他諸種の方法を利用して大に需要區域を伸張せざるへからず。而して若し印度紅茶を製せむと欲せば、先づ彼我の製茶上の便否、製茶法の良否、規模の大小、茶質の特色、及び需要者の嗜好等を査察せざるを得ず。

産生地の場合を按するに、印度に於ては多くは山腹に茶畠あり。故に早春三、四月の季節は山麓の茶樹先づ嫩葉を發芽す。故に此第一期は山麓の茶葉を摘み、五、六月の季節には進て山腹のものを摘み、更に七、八月の終期には山嶺のものを摘む。要するに印度に於ては摘葉の時期は三期に亘り、一年の大部分を占め、復た製茶は機械力を應用するか故に、晝夜間斷なく作業し、鉅額の精製を僅少の時間に成就するの利あり。印度紅茶が優勢の地歩を獨擅するは、豈に偶然ならむや。

日本緑茶の發生は印度紅茶と趣を異にし、春季即ち四五月の交一時に新葉を發生す。全國各產地概ね此短期間に摘採するを以て茶摘女工の拂底各地に起り、從

て賃銀の騰貴を來たし製茶價格亦之に伴ふて昂進す。而して製茶法は主として人手を使用し機械を利用せず、復た製茶業は短期間の産業に屬するを以て茶業家は農事の間業と藐視し、本位とせず寧ろ副位と看做せり。故に茶業家の如きは、製茶業の規模を大にし資本を多くし、機械を用ひ製法を巧にし、産出額を増し、需要區域を廣くするか如き進取政策を樹立踐行するの志なきものゝ如し。是れ予か本邦綠茶業の爲に深く憾みとする所也。

之を日本當業者に聽く、我國産出の茶葉には水分を含蓄すること多量也。我國の如き雨量多き土壤は綠茶に適するも紅茶に適せず。予惟ふに是れ所謂日本沿岸の潮流即ち黒潮の影響を蒙るに基因するものに外ならずと、黒潮が日本全土の南北表裏を奔馳し、西南より東北に趨くに方り、温暖の大氣と俱に、多量の濕氣を内地に遺留し、桑葉及び蠶蟲體質に異常の影響を及ぼし、特種の蠶絲を生出せしむることは、予か生糸の篇に於て詳述せし所の如くなるか、綠茶も亦桑葉と幾む

は同一の影響を蒙ることを識るへし、之を以て我邦製茶業の興隆を圖るには我土壤に適せざる紅茶を栽培するよりは専ら適當の綠茶を栽培し、資本の充實製法の改善、機械の應用、販賣法の矯正を力め、以て大に歐米市場に於ける日本綠茶の勢力を伸暢し、其の需要範圍を擴延し、印度及び支那紅茶と競争するの道を講せざるへからず。夫の徒らに我國風土の特質に鑒みることなく、徒らに印度紅茶を移植し、以て印度及び支那製茶と顔顔せしめむとするか如きは、獨り天與の特質を無視するの拙策たるのみならず、耕作法並に製茶法の急變より生ずる得失利害を辯識せざるものと謂ふへし。

嗜好の點に於て之を視るに、米國人が綠茶よりも寧ろ紅茶を鍾愛するは事實也。加之ならず、印度の製茶家及び販賣家は先年四拾萬弗を募集し、之を利用して米國に於ける紅茶販賣區域を皇張し、日本綠茶を全く掃蕩驅逐せむと企て、爾來新聞紙を利用し、各種の商標を躬方とし、拮据經營、十年一日の如し。是を以て明治二

十九年政府は我製茶の危機に逼れるを悟り、直に斯業の振興、米國の情況視察及び販路伸張の爲め、一個年七萬圓を限り、向五個年間補助するの政策を樹て、之れが法案を議會に提出し、貴衆兩院の賛同を得、爾後實施繼續して今日に及へり、然るに之れが實況を查察するに、綠茶の輸出著るしき増額を呈せざるものは、蓋し印度及び支那紅茶の銳烈なる競争あると、紅茶が綠茶に優りて米國人の嗜好に適するの二點に職由する所多きに居るへし。

特に一昨年米西戰役の際、合衆國政府は軍事費増徴の手段として輸入茶一昕米貨拾仙の關稅を賦課せり。是れ我綠茶貿易に對する大打撃となれるもの也。今茲に其の結果の統計を擧げむ。

一八九八年	我綠茶ノ米國輸出額	八〇〇〇〇〇〇〇	昕
全	米頭割人	一三三三	昕

前記のものは關稅賦課以前のものなるか、左に昨年一月より六月に至る新稅賦

課後の統計を示さむ

一八九九年	米頭割人	九八	昕
-------	------	----	---

綠茶輸入額の急減は數字の明指する所也。然るに珈琲は珈琲「ツラスト」の運動抗争に由り、依然無稅の特典を有するを以て、需要益々増進するの趨勢あり、即ち左表の如し

珈琲消費額並人頭割

一八九八年	消費高	九〇〇〇〇〇〇〇	昕
同	米頭割人	九〇八	昕
一八九九年	全	一一	昕

是に由て之を觀れば、一昨年珈琲の消費高は茶の十一倍に當り、特に輸入茶課稅後、茶の貿易高は愈減少し、而して珈琲は益々増進せることを知るへし。由來我邦の綠茶は前述するか如く印度及び支那の紅茶の競争に遭逢し、屢に孤壘を嬰守



するの窮地に在りしに、今復た税率の伸縮寛猛の爲め、珈琲なる勁敵に挾撃せられ、腹背敵を受くるに至れり。是れ所謂死地に陥れるもの也。噫如何にして將來之れか活路を獲へき耶。

曩に合衆國政府が輸入茶一十拾仙の關稅を賦課するの法律を制定するや、日本茶商等は其の茶のみに課稅して珈琲を依然無稅にするの不權衡なる事由を同國政府及上下兩院に移牒せり。是に於て議院に於ては其審議中珈琲一听到付米貨參仙の課稅を徵すへしとの修正案を提議せしか、同國珈琲、プラスチックの反抗運動の爲め、該修正案は忽然として消滅し、原案の輸入茶賦課稅案のみ通過するの不幸を視るに到れり。請ふ是より試に米國政府が輸入茶に重稅を課し獨り珈琲のみを無稅の特典に沐せしむる所以の真相を纏述せむ。夫れ現時珈琲の耕作地は主として玳瑁、南米地方にして、之れか資本家となり、其の耕作、其の製造及其の販賣に従事する者は悉く米國人也。故に渠等資本家に農工及商三楷の事業に密

接の關係を有し、隨て珈琲貿易の消長盛衰に對し重大なる利害を感ず。渠等か珈琲の需要區域を擴張するの必要を認め、復た飲料として珈琲と種類を同ふする輸入茶を驅逐せむと企圖するは蓋し必至の數也。是れ米國人が輸入茶に重稅を賦課する事由の第一也。且つや支那印度及び日本よりの輸入茶は米國茶商の手のみにて販賣せられ、復た概して珈琲、チョコレート等の飲料品と一所に併せ賣らるるの姿なり。故に米國販賣者は自家の休戚を感ずること深き珈琲のみ無稅たるを獲は、倍の輸入茶の如きは重稅を賦課せらるるも更に顧慮する所にあらず。是れ輸入茶に苛稅を嚴課する事由の第二也。從來米國には、フリー、プレッ、即、ファスト、テーブルと稱する一種の經濟主義行はれ、職工勞役者等の下流人民の生活の便益を圖る爲め、日常朝餐に供する茶を無稅にし、復た麵包及び牛酪をも無稅にするの方針を採れり。然るに近時米國殖産興業の伸張意表に出て、下流社會生活の程度著るしく、豐富を加へたるを以て、飲料品を無稅するの要を視ざる

のみならず、復た之に課税するも反抗の聲を聴かざるに到れり。是れ輸入茶に對し斷乎として重税を賦課せし事由の第三也。本邦茶商等が曩に該法律制定の際之れが抗議を試みしに、米國朝野の人士は米西戰役の軍事費の新税源と唱せしむ。平和克復後、玳瑁、ボート、ソコ、及び弗律賓に於ける戰後の經營費として現今及將來に於ても尙ほ關稅賦課の止むへからざる事情あるか爲め、輸入茶に對する重税の賦課は今後尙ほ未だ廢棄せらるることを得ざる事由の第四也。既に四個の事由のあるありて、輸入茶に苛税を課すに到れり。其の米國の珈琲を保護して外國輸入茶を愛顧せざる由來深且つ遠しと謂ふへし。我日本綠茶の前途慨歎に堪へざる也。

米國市場が日本製茶の苦戰場たること斯の如し。知らず英領加拿陀に於ける市況果して如何乎の觀る所に依れば、我綠茶は之を米國に賣ふて之を加拿陀に得たるものの如し。米國市場を以て其の死地とせば、加拿陀市場は其の活路なるか

如し、日本より輸出する綠茶の中、其の三分の二は米國に、餘の三分の一は加拿陀に於て消費せらるるもの也。然るに人口と消費額との比例より之を視るに、米國は七千萬の人口を擁して其の三分の二を消費し、加拿陀は米國人口の十四分の一即ち五百萬の人口を以て尙ほ克く其の三分の一を消費す。是を以て之を觀れば、加拿陀が我日本綠茶貿易にとり最も有望なる大華主たることは、灼灼乎として夫れ章也。殊に昨年春加拿陀に於ても米國と同しく輸入茶に對し課税すへしとの議起りしも、同議會に於て討議の未、不成立に歸せり。日本綠茶の爲め慶すへし。然りと雖も日本綠茶は加拿陀に於て悠遠に現時の特典を享受し得へき耶。頗る疑なき能はず。現に加拿陀の政費は近年著るしく増進し、復た各種の經營を創始せむとし、年年三百萬乃至五百萬弗の不足を生じ、新税源を覓むること急也。當局者間には輸入茶に課税するを以て良策と認むる者有り。惟ふに異日早晚事實となりて顯れ來ること莫きを知らむ乎。日本茶業者は夫れ今日に於て米國並に

英領加拿陀市場に於ける大勢の推移に鑑み、獨り支那及び印度紅茶並に珈琲の競争あるのみならず、兩國に於ける經濟政策儼乎にして確立勵施せられ、外國製品を容るるの餘地なからむとするの危機に頻せることを悟り、大に決心する所なかるへからず、翻て綠茶產出を棄てて紅茶產出を圖らむ歟。我國の風土氣候之に適せず、又發育、性質偕に佳良ならず、栽培耕作亦綠茶と同しからず、發芽の時期短く、機械應用の資本に匿しく、經濟上の情勢亦之を允るさざるを奈何せむ。要するに我邦は幾むと先天的に綠茶國たるの性能あるも、紅茶國たるの性能極めて少し。故に今日に於て綠茶國より豹變して紅茶國となるは策の宜しきを獲たるものにあらず。復た成功せらるへき道にあらず。我茶業者は須らく綠茶國として死守するの覺悟を堅くし、供給者の位置に在りなから濫りに外國に於ける需要者の嗜好を矯めむと企圖すること無く、若し此上、價格低減すること能はざれば、其製造方法を改良するの途を講し以て我か競争者たる支那及印度の紅茶並に珈琲と對抗するの雄心なかるへからず。然らすむは我綠茶貿易は兼に一九〇一の米國の關稅重斂に蹙頭し、今後再び加拿陀の新稅に窘感するの日あるへし。綠茶貿易の既往、現時及び將來業に己に斯くの如し、茶業者の深思遠謀を促かすの急亦斯くの如し。起て綠茶製造業を促新し、販賣機關を弘伸し、以て需要區域を擴延し、富國の大本を鞏堅ならしむるは、今の時を措て復た孰れの時に求めむ耶。

度

## 第九 外資輸入

大凡歐米諸國の資本が外國に放下せらるるには、二箇の各相異なる道路を経由す。第一、歐米諸國の資本が文明國に放下せらるるもの、第二、其の資本が未開國に放下せらるるもの、即ち是れ也。

第一、歐米諸國の資本が文明國に放下せらるる情況。

夫れ歐米諸邦は人種を同じくし、宗教を一にし、政治的傳説を偕にし、道義的標準を齊くし、同一起原の法律を遵奉し、國風慣習、人情幾ひと同一典型に出て、農、工、商業及之に關聯する經濟機關を同じくし、多年相識り、相信し、互に相扶掖し、俱に相憑依するの慣習を有し、彼我の經濟上の情勢の如きは、固より相曉知し、通信機關亦整備し、一たひ放下する資本の安全及び其の擔保の性質等確實なるを以て、歐米諸國の資本家は同宗教、同文化、同人種、同法律、同教育の制度を具備せる佗の文

明國に其資本を放下す之を例證せむに則ち英國の資本は安俱盧撒遜人種か移住せる諸植民地を始めとし、歐洲大陸諸國、亞米利加合衆國等に放下せられたり、而して是等の諸文明國は列祖を同じくし、文化を一にせるを以て、列邦間には所謂狹義的制限的の同胞兄弟主義遵守せられ、相輯睦し相敬愛す、此を以て縱令争鬪蕭牆の間に起るとも、互に基督教主義を恪守し、敢て佗の商業區域を侵犯潰傷するか如きことあらず、放下せる資本は戰時と雖も平時と同じく安全にして、投資家をして秋毫も危懼の念を懐かしむること有る莫し、是れ歐米の資本家か安心して巨額の資本を文明國に放下し、以て各種の殖産興業の隆昌を致し、自佗の共益を企圖増進する所以也。

第二、歐米諸國の資本か未開國に輸入放下せらるる情況。

夫れ未開國に在ては、沃野の開墾未だ幼穉の域を免れず、深林の採伐未だ其緒に就かず、山海の遺利固より蒐集せらるるに至らず、水陸の運輸亦整備利用せらる

るに至らず、隨て土地より生ずる農産物の栽培、收穫を觀ること能はず、商工業の人為的設備なく、天興の利源徒らに埋没潜匿して、世界の經濟界に對し、悠久に何等の影響を及ぼすこと能はざる也、而かも未開國と雖も、偏強なる勞働者なきに非らず、經驗ある貨殖家なきに非らず、而して尙ほ天賦の富源を開拓すること能はざる所以のものは佗なし、一の資本を缺如するか故耳、故に苟も資本を投し、以て稼穡の道を改善し、水陸の便を啓らき、農耕に、牧畜に、採鑛に、漁業に、其他總ての工業に近世的學術を應用し、至良の經濟的機關を創製し、最善の商業的機關を整備せば、一攫千金の巨利を收むることを得へし、是を以て歐米諸國の資本家は此未開國に於ては法律の擔保なく、又土民の襲撃屢々起るにも拘らず、宗教、教育、政治等諸制度に於て、天淵の差異あるに拘らず、豪膽に巨額の資本を放下す、是れ一見無謀の舉措に似たるか如きも、渠等資本家の背後には恆に強大なる保護者あることを忘るへからず、保護者とは誰れぞや、曰く資本家か屬せる邦國其物即ち

是也。若し一旦放下せる資本にして未開國民の爲り不正なる手段等に依り損失を蒙り、若くは掠奪せらるるか如きことあらむ歟。該邦國は直に強硬激烈なる外交談判を開始し、至適の處辨を斷行し、以て精嚴に自國人民の權利を保全すへし。太甚しきに至ては蠻夷土匪の暴動を以て、奇禍措くへしと爲し、臨機應變の權道を弄し、過大の要求を提起し、渠れ若し聽かずむは、立ちどころに兵を動かし、敵を破り、土地を併呑し、版圖を伸張し、以て一大富源を啓く。南北米、新西蘭、濠洲、亞非利加に於ける歐洲諸國資本の放下せらるる情況は、凡て同一軌轍に出づ。方今列強は是等の諸大陸に許多の領地、植民地を有せるは、多くは斯の政策遂行の結果に非らざるは莫し。所謂國旗の飄へる處、軍艦之に伴ふとは、此政策を辯破したる真理也。文明國資本家は恆に萬一を賭して資本を未開國に放下し、事變生ずるの際には直に自國政府の保護を仰ぐ。斯くの如くにして國利の存する處、兵力恆に隨伴し、保護政策一轉して、侵略主義となり、再轉して植民地扶植となり、竟に一大富源

を攫占し、富國の道を啓くに至る。是れ歐米諸國の資本か第二種の通路を經由して、未開國に放下せらるるの原因並に其の結果也。

輓近歐米の資本家は自國農工商業長足の進歩に依り、資本大に増殖せしを以て、自國疆域以外即ち海外諸國に其の資本を放下せしとするは、事實なり。是れ經濟學の原則たる、大凡利益の存する地には、資本自から注下流入するの眞理を現實にするもの也。此くの如く歐米諸國の盈滿充溢せる資本か唯一の通路たる海外放下を是れ免むる時に方り、我日本帝國は果して外資を誘致するの資格を完備する乎。是れ我朝野の人士か外資輸入説を唱道するに先ち、講究解釋すへき至重至緊の問題也。

予の觀る所を以てすれば、我日本は現時各般の方面より查察するに外資を招致するに足る至適の資格を具有せず。請ふ其の事由を論明せむ。我日本は人種上、宗教上、歐米諸國と同一の軌轍を經由せず。經濟並に通信の機關未だ整備の域に臻

らす。人種及び宗教相異なれるを以て、利害休戚、同情相愛の念自から致からず、道義人道の理想的標準も亦同しからず。又經濟並に通信の機關整備せざるを以て、彼我の經濟事情、神速精確に相曉知せらるるに由なし。是を以て歐米の資本家は、根底より日本人の道義的信念の醇疵を疑ひ、又日本經濟の信用の深淺に感ふは、必至の數也。縱令近世的法律の原則に淵源せる諸法典已に制定實施せらるるに拘らず、是等の重大なる障壁あるか故に、歐米諸國の資本家は、渠等か文明國に對し、第一種の通路を經由して、其の資本を日本に放下すること能はざる也。是れ我國經濟社會にとり、眞に千古の恨事に非らず耶。

然らば則ち第二種の通路を經由する外資輸入の方法は如何。現時の日本は昔時の日本に非らず。治外法權も撤去せられ、對等の條約實施せられ、行政、司法並に地方自治の制度等の機關完備せられ、内外人の性命財產は既已に中正公明なる保護の下に托せらるるに至れり。是れ固より國家の慶事なりと雖も、斯くては第二

種の外資輸入に適するの時期を經過せることも亦認識せざるを得ず。要するに日本は未だ前述せし第一種の外資輸入國たるの位置に至らず。又第二種の外資輸入國たるの時期を逾えたり。世界的經濟の視點より觀察すれば、日本は正に兩者の中道に彷徨せる邦國と謂はざるを得ざるなり。凡そ字内の顯象に依れば、進歩するに非らずむは退歩するは邦國の常態也。我日本の經濟的國位をして直進昂昇せしめて第一種の外資輸入に適する文明國たらしむるは、寔に我朝野經濟家の重任也。況むや歐米諸國の資本家の如きは日本を以て經濟上將來有望の國土と思惟せるに於てをや。内地開放後僅に五六月を閱みせし今日に於て、外資輸入を觀ざるを以て直に失意すること莫く、宜しく之れか方法を講し、其の設備を整へざるへからざる也。

然るに當今の實業社會、經濟社會の人士等口を開けは輒ち謂はく、「外資輸入外資輸入」と、其の言や乃ち可也。其の方法に至ては更に講究する處なし。何ろ言行の相

一致せざるや、外資輸入説は固より善し。今日の要務は一に上下朝野の別なく、協和交贊して以て外資招致の方策を定め、之れを準備を完成するに在り。今や我日本經濟社會の輿論著るしく進展し、外資輸入を以て富國の好手段也と識認するに至れり。若し此説を十年前に唱道したらむには、直に國を認るの好策也とし外資輸入計畫者を目して賣國奴也と誹譏したりしなるへし。我國經濟的觀念の暢達、以て概見すへし。苟も海外諸邦及び其の主要の各植民地の殖産興業史を披閱するに大凡ろ邦國存立と經濟の健全なる暢達とは相離るへからざるものにして、經濟の幼稚なる時期に於ては、外資輸入を善用し、自國法律の下に拘束保護し、其の運用擒縱の道を錯らすは、一國の富源を開拓し、殖産興業の實を擧げ、國利民福の道を啓らくことを得へし。

之を要するに、日本經濟界の現狀並に其の將來を查察すること莫く、又外資招致の設備を講究することなく、濫りに外資輸入論を提唱するは、予の採らざる所也。

夫れ歐米の資本は二種の性質を以て、海外に放下せらるるもの也。

第一 歐米の實業家か工業資本として自ら海外に携帶して其事業に放下するもの

第二 歐米資本家か單に資本として元利の支拂及び其返還の安全確實を待て海外に放下するもの

若し此二種の區別を詳にすること莫く、漫然外資輸入を唱道企畫するとも、其の目的を達すること能はざるへし。予は米國巡遊中、第一種の外資輸入者、即ち工業資本として外資を日本に輸入せむとする實業家に就き、質たすに外資輸入の見込を以てし、其の所懐を詳知することを得たり。請ふ之を左に概説せむ。

歐米實業家は日本を以て工業資本放下地として有望也と識認せり。詳言せば渠等は日本には鑛山の開掘すへきもの多く、農産物の栽植すへきもの饒にして、其の他各般の工業の興隆すへきもの衆きことを識認せり。然りと雖も渠等は日本



内地に其の資本を移植して機械場工場を創設し以て各般の工業上の經營を爲せば、當然の利純を收むること能はず却て意外の不利を觀るに至るへし、其の事由如左。

- 一 日本人は資性聰慧伶俐にして且つ十九世紀の文明に觸接し近世的教育を享受し、最近至新の學術、技藝に通曉せるを以て、一旦歐米の實業家か日本内地に各種の工業を創立せば、渠等は直に其の要訣并に蘊奥を知悉するに難からざるなり。
- 二 日本人は商工業に於ける道德を嚴重に守らざるを以て、若し歐米の實業家に使傭せらるる間に工業上の要訣を採知せむ歟、立どころに日本人と協議して同一の工場を新設し、以前の雇主に對し盛に競争を開始すへし。
- 三 若し日本内地に工場を設立し、日本の職工を傭使せむ歟、渠等は資性敏活伶俐なるに拘らず、雇主に向て理屈を唱へ、不遜の意を披み、和易從順の美德

なく、使役上、幾多の困難厄窘を生ずるの虞有り。

是等の點を講究せば、外資輸入地としての日本は、實に對岸の支那に如かず。(一) 大凡そ日本内地にある鐵産物の如きは、一として支那に備はらざるはなし。(二) 支那人は十九世紀の教育を享受せざる故に、學術及技藝の蘊奥及要訣を習得するの力なし。(三) 支那人は日本人より遙に商工業の道德敦厚なり。(四) 支那人の職工は從順の美德あり。(五) 支那に於ける工業品の需要區域は頗る大なり。(六) 面積並に人口の點に於て、支那と日本は天淵霄壤の差異あり。(七) 支那には日本の如き善美を盡くせる法典の制定なきも、若し内地に於て暴民蜂起し、工場に對し妨礙を加ふるか如きこと有るも、直に外交談判の手段を秉り、之れか賠償の道を致さしむること洵に易易たるもの有り。且つや歐米の實業家か工業資本として自己の資本を海外に輸入放下するに方り、彼等が最も留意精察するは販賣區域の小大如何に在りて存す。今支那は販賣區域としては幾むと宇内無雙の好資格を具有すと

謂て可也。歐米實業家か今日日本を度外視し、却て支那を以て無比の外資輸入地と認定せる事由眞に茲に存せり。以上は是れ歐米實業家か刻下懷抱せる見解也。惟ふに斯の見解は眞に日本支那の經濟的情勢並に世界經濟の大勢を洞觀明察せるものと謂ふへし。

是を以て之を觀れば歐米の實業家か第一種の資本即ち工業資本として自己の資本を日本に放下するの意なく、寧ろ支那に注入せむと欲するの意急なることを識るへし。然らば則ち第二種の外資輸入、詳言せば、資本家か海外に向て單に資本として貸付くるの方法は、果して望むるや否。

是等資本家の見解に據るに、其の主眼とせる所は佗なし、海外に貸し出せる其の資本の利息を毎年精確に受領し、償還期限到らば元金の支拂を確實に履行せしむるに在り、渠等は此の安全を第一要件として資本を放下するか故に、苟も海外に其の資本を注入せむとするに方りては、是等の事項の性質を査覈し、既設會社

の債券に對し貸付くるものなるか故に、先づ其會社の組織、資本、營業方針、決算報告、配當額及び將來に於ける得喪盛衰、中外の經濟的情勢を審察し、又た同會社重役の人物、信用及技術如何を曉知し、自から適當と認定したる後ならざるへからず、是等の資本家は資本を貸與せる會社の財産を抵當とすることを好まず。蓋し會社倒産の場合に到り、歐米の債權者たる資本家は債券に對し會社の財産を沒收するとせば、代理人を派出して日本國內に於て營業せざるを得ず、是れ極めて不便利不經濟の事に屬す。歐米資本家の素志とする所のものは、躬は本國に在りて單に資本を海外に放下し、定期毎に利息を收め償還期限に及て元金を取り而して後復た資本として他に貸付け、以て規則正しく其の資本を有益に運用するに在り。故に渠等は資本を貸付けたる會社の財産を流れ質として沒收することを憎惡す。是れ歐米の資本家か金貸業を營む上に於て最も不利とする所のもの也。是を以て苟も外資輸入を企圖する人士の要務とする處は前述せし第一種及び

第二種の資本貸出の性質並に其の目的を知悉し、以て之を招致するにあり、然らずは百の計畫、千の考慮も畢竟畫餅水泡に歸すへき而已。

然りと雖も、方今我日本帝國をして世界經濟界に屹立せしめ、之を近くしては對岸の支那帝國、之を遠くしては歐米列邦に對し、我商工業區域を皇張し、世界に於ける日本の經濟的國位を進暢せむとするには、日本域内の資本にては闕如寡少を感ずることあるは勿論、到底外資を仰ぐの外、他に途なきは識者の夙に看破せる所也。當今の要務は外資輸入説の是非早晩に非らずして、一に外資を招致する手段の講究に在りて存す。而して其の手段中最緊至重の要件は、外國資本家をして意を安し、信を敦くして資本を放下せしむるに足る確實鞏固の擔保を與ふるに在り。近時一部の人士は外人に土地所有權を賦與し、以て外資を招致すへしと唱道す。然るに予か米國に於て調査せし所に據れば、米國の東海岸即ち大西洋に面する諸州は近年に至り始めて外人に土地所有權を賦與せり。蓋し是等の諸州に於

ては經濟上の狀態未だ顯著なる進歩を爲さざる前に方ては敢て土地所有權を外人に賦與せざりしも、近年商工業の基礎鞏固に趨きしを以て此舉措に出でしものなり。而して南部、西部及び西北部の諸州中には外人に土地所有權を賦與せざるもの尙ほ多きに居る。現に市俄古市の如きは輒近に於ける商工業の進暢は歴然として觀るべきもの有り、人口及び商工業の二點に於て、紐育に次ぎ、優に北米合衆國市府中第二に位する大都たるに拘らず、今日尙ほ未だ土地所有權を外人に賦與せざるなり。予昨夏米國淹留中、彼地の錚錚たる經濟家及び銀行家に就き市俄古市に外資を招致せし方法を尋ね、左の事項を聞知することを獲たり。今を距る二十有九年前即ち千八百七十一年十月八日市俄古市火を失し、燃燒三晝夜に亘り、全市幾むと烏有に歸せり。之を以て罹災後紐育、波士敦等の資本家より一時資本を借り入れ、新に家屋を建築し、其の後農工商業の興隆と俱に遞次之れか返還を爲し、二十年を滿たすして負債總額を償還せり。爾來該市の經濟は駸駸

乎として進展暢達するの勢あるも、獨佛英等の資本は刻下尙ほ陸續として輸入し、須臾も止まざる也。而して同市に於ては是等歐州諸國の資本家に對し、一塊の土壤に其の所有權を交付せざる也。而して外資か日に月に洪濤の如く驟雨の若く瀉き來る所以のものは佗なし、經濟の原動力たる市俄古市の世界的信用、商工業の有望、外資放下の安全あるか爲め耳。是れに由て之を觀れば、土地所有權を外國資本家に賦與することなく、苟も克く經濟上の原動力を涵養貯蓄せば、外資を招致すること眞に易易たるものあることを識るへし。

予歸途英領加拿陀「モンツレオール」に過きり、該地の經濟的現況を視察せり。夫れ英領加拿陀の地たるや、半は佛人、半は英人の經營に屬し、近時獨逸、瑞典、那威人の移住亦多く、歐州列邦と同一の宗教、同一の人種、同一の法律の下に在りて統治せらるるに拘らず、又經濟機關並に其の運用の方法全然同一なるに拘らず、外資輸入極て難色有り。目下「モンツレオール」市に一大鐵道會社を創設し、大西洋面より太

平洋面に達する一大鐵道加拿陀新設鐵道及「フアッシュヨグ」問題参照を敷設むとするの計畫あるも、資本を吸収誘致すること難きか爲加拿陀中央政府及此鐵道の通過する各州の政府は該會社發行の債券に對し、第二の保證に立ちたり。惟ふに加拿陀政府が歐米の資本家に對し、第二の保證に立ち、資本償還の擔保を爲さざるを得ざる事由は佗なし、英領加拿陀は今日尙ほ未だ經濟的設備の不完全及世界に於ける信用の薄弱なると、其の國狀の未だ歐米に曉知せられざるに職由すと謂はざるを得むや。然れども英領加拿陀は宇内の形勢に迫られ、太平洋鐵道會社の外、更に一大鐵道會社を新設し、運輸交通の途を開き、彼の廣大なる沃野を開拓して富強の實を擧げむと欲し、政府に於ても亦此の私設會社の債券に對し、第二の保證に立つことは目下の形勢上必要の政策と認めたるに依るものならむと云ふ。

獨り加拿陀政府のみならず、露國政府に於ても露清銀行の社債に對し、第二の保

證に立つの經濟政策を乘れり。請ふ其の願未を左に説述せむ。

露都聖彼得斯堡駐紮英國大使「オーコネル」氏か英國總理大臣「ソールズベリー」侯に遞送せし報告書を披閱するに、露清銀行は東清鐵道會社を組織し、東清に於る鐵道敷設の測量及之れか敷設を完成し、又鑛山を採掘し、各種の工業を創擧し、且つ諸般の商業を營む爲め、同銀行中に前記諸項に關する各部局を設定すへし。而して同銀行の株券は五百萬留、一株五千留として一千株とす。此の株は支那及露西亞兩帝國人民に限り、株主たることを許すもの也。而して露清銀行は其株金五百萬留と歐米の市場にて發行する債券に依て收得したる金額とを合せて其營業資本とするの方法なりとす。而して此の債券の發行時期、金額、利息等は其事業の進捗に伴ひ必要なる場合に於て一に露國大藏大臣の認可を享くべきこととす。露國政府は此の株金に對しては元利金の償還を保證せざるものなれども其社債に對しては特別の方針を採り、其利息の支拂及元金の償却に對しては政府

に於て第二の保證に立つものトす。是れ歐洲に於て財政に經驗ある露國大藏大臣「ウヰヤズ」氏か北方支那に對する經濟政策の大骨子也とす。然らば則ち露國政府は露清銀行を以て北清の鐵道敷設、鑛山採掘、工業商業等に對應する經營に要する資金供給を歐米市場より吸收する爲め、銀行の債券を發行し、其の元利償還の保證を爲し、以て各般の經營を大成し、自國勢力扶植の企圖を貫徹せむと欲するの微意あるは、此の報告書に於て照也。

北清に於ける露國政府の此の經營は、大に英國人民を刺戟憤發せしめたる所あるもの如し。現に昨年九月五日大英國の各商業會議所の聯合大會を倫敦に開きし時「リード」商業會議所の議員「ウヰラン」氏は支那に於て英國人民か建設する所の鐵道會社の資本金(即ち株金及債券)の元利の償還に對して、英國政府は之れか第二の保證を爲すべきこと眞に刻下の急務にして、且つ英國の商業を興隆振作し、又大英國の國權を伸暢する至重至大の要件也との議案を提出せしに、滿場

一致を以て之を可決せり、

之を要するに、一方に於て日本經濟家か歐米各國政府の經濟政策及其の經濟界の趨勢並に資本家投資の要件に精通し、復た佗の一方に於ては、歐米の資本家を以て日本經濟界の情勢を知悉せしめ、渠等をして安心して其の資本を日本に放下せしむるの時代に臻らすむは、外資輸入は得て望むべからざる也。而して今日の如く未だ此時代に達せざる間に於て、一國の富源を開拓し國家の經濟を豊富ならしめむと欲せば、勢ひ政府たる者は國家の監督の下に安全確實なる擔保を以て外資を招致せざるべからざるなり。是れ即ち第十九世紀の末年に於ける、否將さに來るべき第二十世紀に於ける最も嶄新、最も健全なる經濟政策にして現に英領加拿陀政府及露國政府か採用せる所也。予は此政策を新に採用せる所以を論明する所あるべし。

夫れ現時世界列強の班に伍する歐米諸國の政府及其の理財家か最も焦心苦慮

する所のものは軍備擴張と政費膨脹の二大難件なりとす。苟も一國か自國國防の責務を全ふし、且つ列邦に對應する日進月歩の「兵力權衡」を保維するに足る兵力を常設せむと欲せば、隨時至高至強の標準に據り、自國軍備を擴張せざるべからず。之れと同時に内に於ける國力の興隆並に海外に於ける貿易の振暢を企圖するが爲め、内政、外交、教育の革新、農工商業の獎勵、運輸、交通、金融諸機關の設備、完整を實施せざるべからず。之れが爲め從來業に己に増進せる政費を愈々膨脹せざるべからず。軍備擴張及政費膨脹は世運の變易と伴ふて限りなく、而して之に對應して増加すべき國庫の収入は自から限あり。故に強て限りあるの収入を以て限りなきの支出に應せしめむとするには、必ずや政府に於て公債を募集して以て之れか支辨を爲さざるべからず。既に公債を募集して一時を繕縫せむ歟。之れが爲め國家財政の基礎を薄弱ならしめ、又海外市場に於て自國の公債の價格を低落せしめ、政府は年年歲歲之れか利子を支拂ふ爲め、重ねて新稅源を索め、國

民をして之れか重税を負担せしめざるへからず。是れ恰も右肩の重荷を移して左肩に負はしむるの類にして、國民經濟の進展を阻礙するに於ては則ち一也。然らば則ち如何にせば可なる耶。曰く佗なし一國國民の緊要なる經濟的起業に對し、政府たる者は之を擁護扶掖するの方鍼を乗り、其の國民が組織する會社の債券に對し第二の保證を與へ、以て嚴確なる國家監督の下に其の營業を進行擴充せしむるの一策ある而已。政府にして此經濟政策を乘らば、第一國家財政の基礎を薄弱ならしめず、第二海外に於ける自國公債の價格を低落せしめず、第三増税を徵收して國民の負擔を重からしめずして、國民の經濟的起業を補助し、國民自由の經營に對し、至適の監督及保護を與へ、政府自から手を下さずして世界到處に於ける自國國利の伸暢を企圖することを得へし、是れ自から治めずして善く之を治め、自から爲すことなくして大に爲すことあるの經濟政策に非らずや。而して之を歐米諸國政府の近時の經濟政策に鑑み、且つ第二十世紀に於ける世界

の趨勢に照らし視れば、予の言説の眞なるを識るに足らむ。舊來自由主義を以て經濟の原則となし來りたる大英國の領土加拿陀は加拿陀鐵道會社發行の債券に對し第二の保證に立ちたり。露國政府は目下我隣邦支那に對し著々として自國の勢力を扶植するの手段を講じ、夫の北清の鐵道敷設等を企圖する露清銀行の債券に對して加拿陀政府と同じく第二の保證に立ちたり。辦之大英國各商業會議所の諸代表者は、リード、商業會議所の議員、ウラン氏の動議を交賛し、支那に於る英國人が建設する所の鐵道會社の資本金(即ち株金及債券)の元利の償却に對し、英國政府は之れか第二の保證を爲すべきことを可決せり。是れ實に大英國國民、英領加拿陀政府及露國政府が近時幾むと時を等ふして採りし經濟政策にして、夫の理財の經驗ある露國大藏大臣、ウテ氏及英領加拿陀政府總理大臣、サー、ウイリアム、ロオリエーが斷然此政策を嘉納せし眞意、蓋し窺測するに難からず。故に苟も世界の趨勢を達觀し、歐米列強特に英露兩國の經濟政策に鑑み、我日本

帝國の富強を圖り、又日本の經濟を隆興豐富ならしむる爲め、政府か會社の債券に對し第二の保證に立つは當然の責務と謂ふも不可なきなり。

## 第十 結論

試に前諸篇に於て概論せし字内の大勢を按し、世界の輿地圖を披き、日本帝國の世界的國位如何、第二十世紀に於ける日本帝國の將來如何を考察せば、誰か帝國將來の國運は洋洋として春海の若きものあると信に、此の際、國步艱難を極め、戰戰兢兢として薄氷を踏むか如きの感なからむ耶。夫れ帝國の盛衰廢興は懸りて今後百年間の經營施設の適否如何に在り、苟も至適の時機を捉らへ、最善の國家經營を完成せむと欲せば、須らく先づ中外の大勢を達觀し、歐米列強の内地利源の開發並に對外活動區域、詳言せば、泰西諸邦の農工商業の進暢、外交方鍼の樹立、對外商畧の確立及び軍事特に海軍力の盈實を審にし、人類の智力及体力の活動範圍となるへき太平洋並に其沿岸諸國の情勢を詳にし、以て我日本國民か將來世界經濟暢達上、嚮ふへき大市場、乘るへき政策、整ふへき設備を劃定し、上下協和、



朝野交轉帝國富強の實を擧げざるべからず。

輿地圖を披き日本帝國を中心として其の四周を環視するに、西に一葦海水を隔てて支那帝國あり、其の唯一の長海岸には露、英、獨、佛四國の永久借地、列星聯珠の如く點綴甚布し、北米合衆國の新領土、菲律賓羣島は我臺灣と適く呼て應へんと欲す、印度洋を隔てて英領印度を控へ、濠洲大陸を遠く南西に望む、若し夫れ東に至ては、布哇を太平洋の洋心に囑望し、南北亞米利加、英領加拿陀、露領亞拉斯加諸州相連亘し、以て東西兩半球の一大疆界を爲せるあり、森々たる太平洋の水は日本と東西兩半球とを離隔するも、現代の文明は鐵道、海底電信、及び艦船てふ利器を貢獻して、宇内の距離を短縮せしむ、故に我日本帝國は天然の地位並に文化の貢獻とに由り、宛も東西兩半球の鑰鎖となれり、歐洲は西、改羅、印度洋を經由して、東進し、軍事、外交、貿易の銳鋒は今や日本の方面に駸駸乎として殺到し來らむとし、而して西伯利大鐵道の完成正さに近に在り、約言せば、歐洲諸國は自然の水運

たる海洋及び人爲の陸運たる鐵道を併用し、以て組織的の一大活動を試みんとす。東は合衆國、加拿陀の大陸橫斷鐵道及び太平洋を渡渉して日本に侵入せむとす。加之のみならず、尼加刺瓦運河開鑿せられ、舊來の航路、漚程一萬五千海里を短縮して一萬海里とし、英領加拿陀も亦大陸橫斷鐵道を増設し、新舊二道の鐵道に由りて晚香坡に出で、以て極東に向はむとす。且つや合衆國及び加拿陀人民は太平洋底に電線を敷設し、米亞兩大陸を聯絡せむとするの計畫を爲せり、斯くの如く東西兩半球の交通機關は日本附近を中樞として計畫せらるるを以て觀れば、其の目的か支那、朝鮮及び日本の周圍に在りて、軍事、外交及び貿易上の諸勢力を茲に鐘め、以て第二十世紀の活動を試みむとするの微意あるや、彰彰乎として昭也。此時に方て、日本帝國は歐米文明の軌轍に遵ひ、憲法を制定し、議會を開設し、國民に參政の機能を與へ、法典を議定し、地方自治を實施し、教育の普及を圖り、農工商業の興隆を勵め、以て文明諸邦の列伍に參班するの盛域に臻り、且つ日清戰役の

結果として、五十萬の陸軍、二十五萬噸の海軍を常備し、優に宇内強邦の列に加れり。然るに世界貿易の點より我日本貿易及び經濟の現狀を精査するに、農工商三業の程度尙は未だ歐米に及ばざること遠く、海陸運輸及び交通の機關完整の境に達せず、金融の機關は内地に於て尙は未だ十二分の聯絡なきのみならず、海外諸國との聯絡に至ては、依然として幼稚の感を免れず。此時に當て歐洲の強邦は既に四十年來亞細亞に於ける尨大なる土壤、無盡藏の利源、絶大の人口、多大の購買力あることを鑑識し、自國商利を吸取し、延て政權扶植の一大寶土と認め、其の要地を扼守し、其の咽喉を攫占し、以て異日商權爭奪の地を作為せり。獨り商權のみならず、兵權並に政權分取の準備を經營し、正堂堂として一大輪贏を試みむとし、意氣壯猛、儼乎として犯すべからざるもの有り。特に北米合衆國は近時國土皇張と俱に發動的、世界主義を實行し、内には、ツラスト（信用同盟）の進暢あるを以て、世界の農工商業の各方面に向て、一大競争を試み、貿易の霸權を一攫せむと

するの志有るもの如し。

此を以て世界大勢の推易する所を察し、歐米列強の嚮ふ處を按するに、支那、朝鮮及び日本は列國が將來最も有望の貿易市場として特に選定せしもの如し。而して我日本帝國は斯くの如き世界經濟の急潮に對抗することを得る乎。若し現時の狀態に於て之と對抗せむと欲せば、是れ徒勞耳。否、空論耳。苟も宇内の大勢に駕御し、二十世紀の新潮流に隨伴し、世界貿易市場に馳騁し、歐米列強と勝敗を決せむと欲せば、須らく今の時に方て之れか方畧を樹立し、之れか設備を完整せざるべからず。之と同時に獨り日本内地の農工商業の實勢を審査し、之れか改善新興を圖るのみならず、汎く歐米並極東諸邦の情況を精覈詳索し、以て中外の實勢及び將來の理勢を推度し、世界の形勢に鑑み、萬邦共通の原則に基き、日本帝國の國家經營を立つるに在る耳。我邦の達識活眼の經世家たる者何ぞ私念を擲て公益を擴め、憤發激越、奮て千古不動の經綸を樹立し、帝國經營の基礎を鞏固ならし

めざる。日本帝國が世界經濟の表に立ちて、自國の存立、永續及隆強を決定するは、  
眞に今後百載間の經營施設の適否如何に在り。邦家の前途は多望にして復た多  
難也。經世家たる者曷そ斯の千載一遇の好機に生れて、自己の智腦を究め、帝國隆  
盛の大業に盡瘁する所なくして可ならむ耶。

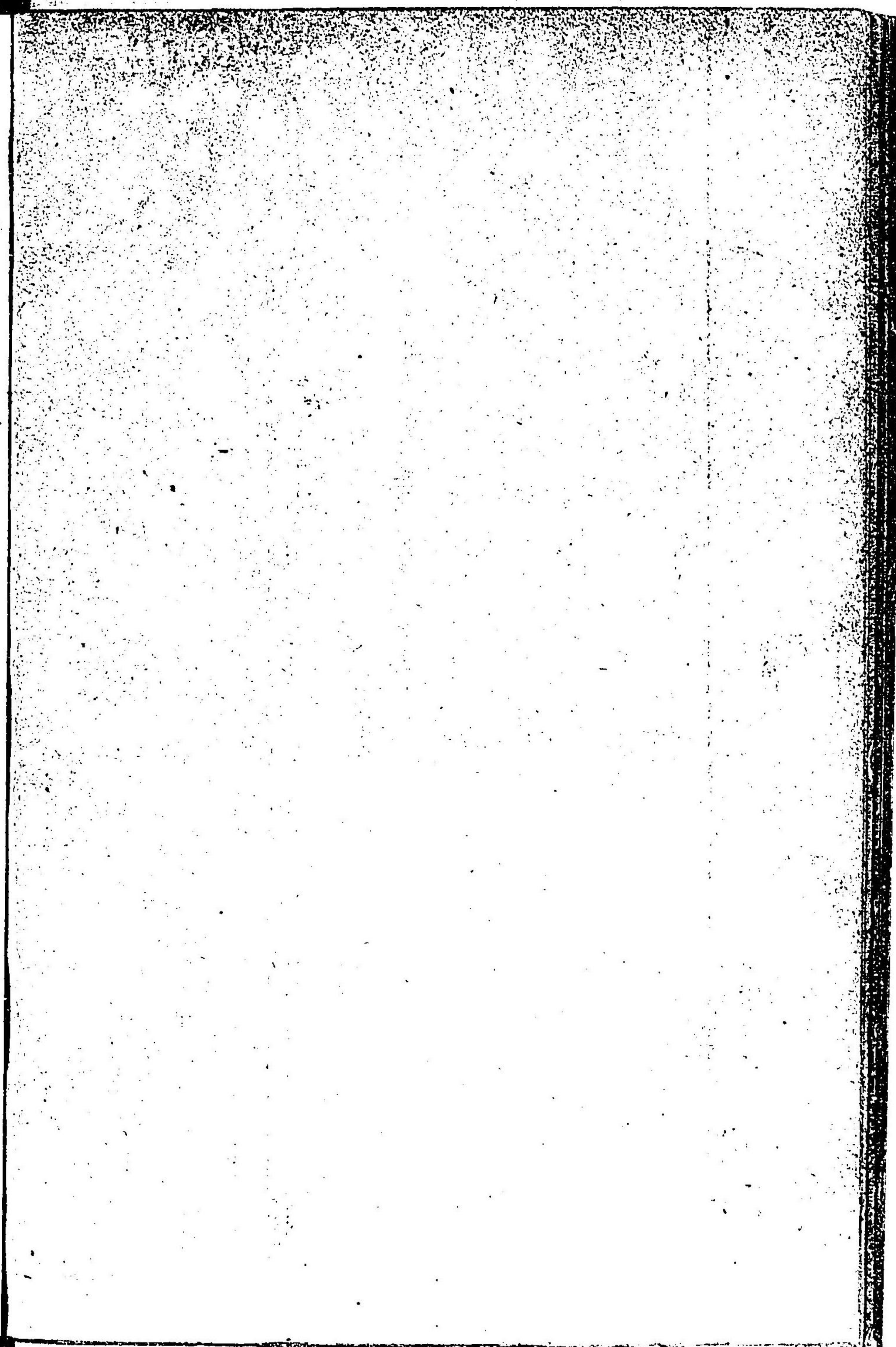
遊米見聞錄完

明治三十三年三月十二日印刷  
全 年三月十六日發行

著者 所有

著者	金子堅太郎
記述者	水上梅彦
印刷者	八尾新助
印刷所	八尾活版所
發行所	八尾書店
全	八尾商店

麹町區一番町三十番地  
四谷區寶篋町四十番地  
神田區錦町三丁目八番地  
神田區表神保町一番地  
京橋區銀座四丁目一番地



81

380

